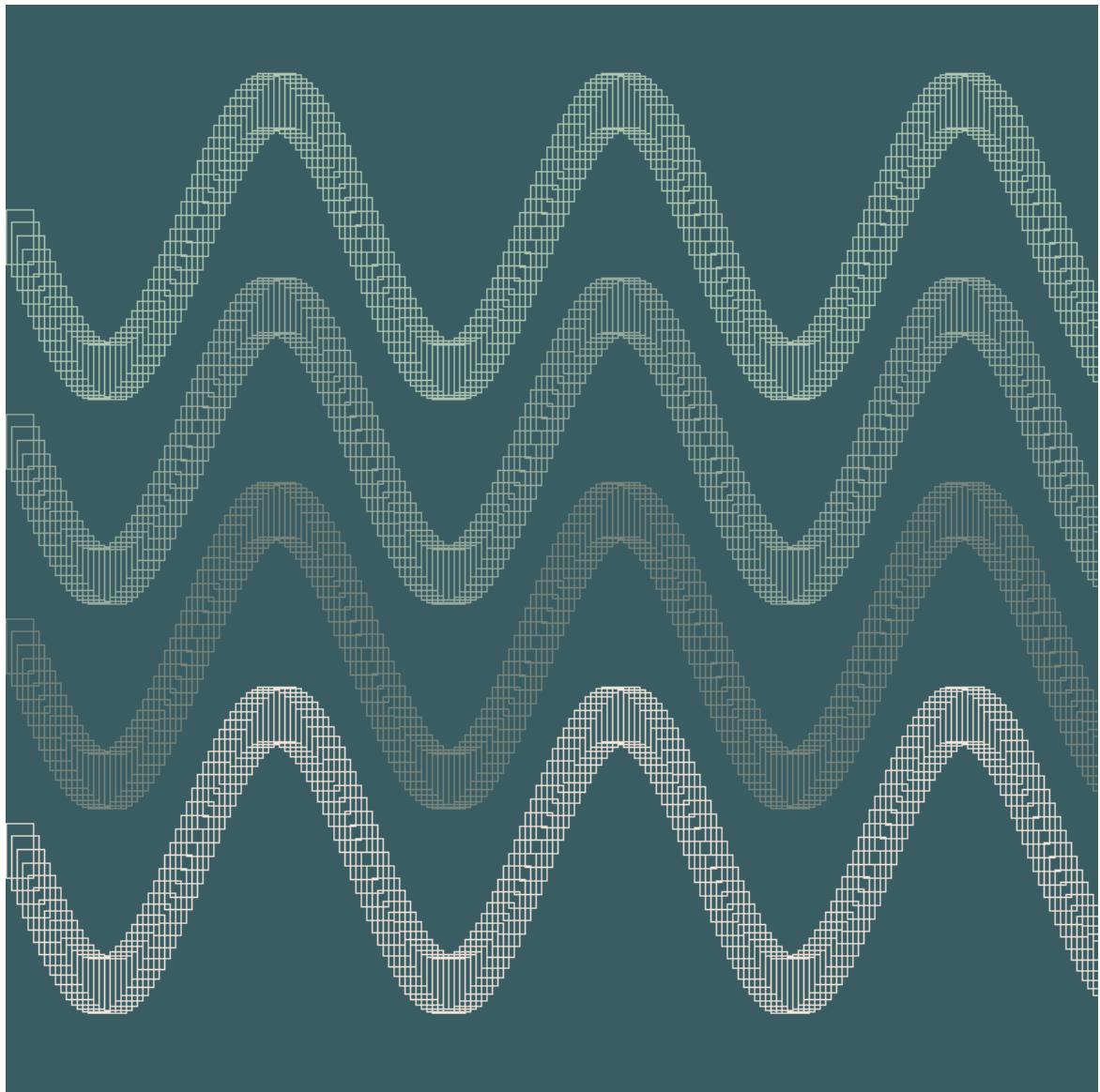


ESP32ではじめる初めてのIoT



電子計算機研究会

ESP32 ではじめる初めての IoT 講座

THEToilet 著

2021-08-18 版 発行

はじめに

これは電子計算機研究会の IoT 講座用に作った技術同人誌です。

サークルに参加するメリットの一つに、興味があることについて学べる機会がある。これがあげられるとおもいます。自分も一年の時にサークルの先輩から、いろいろな勉強会を開催していただき。自分の知見をひろげることができました。本誌が少しでも役にたてば幸いです。

(@THEToilet)

電子計算機研究会とは

芝浦工業大学公認の技術サークルです¹⁾。主にゲームや Web アプリの制作活動やコンピューターサイエンスの勉強を行っています。

お問い合わせ先

本誌に関するお問い合わせ : toileito.wc.benki@gmail.com

想定読者

- IoT に興味はあるがなかなか手をだせない人
- 通信に興味がある人
- 電子計算機研究会に所属している人

前提とする知識

- 何らかのプログラム言語の基礎知識

1) 電子計算機研究会 HP <http://den3.net>

目次

はじめに	ii
電子計算機研究会とは	ii
お問い合わせ先	ii
想定読者	ii
前提とする知識	ii
第1章 電子部品の準備	1
1.1 電子部品の購入の方法	1
1.2 本誌で利用する電子部品	1
おすすめ製品	2
第2章 環境構築	4
2.1 ESP32 とは	4
2.2 ESP32 の開発環境	4
2.3 Arduino IDE のインストール	5
2.4 ESP32 用ボードマネージャーのインストール	10
2.5 Hello ESP32!!	14
ブレッドボード	14
PCとの接続	15
プログラムの記述	18
プログラムの書き込み	22
動作確認	23
シリアル通信とは	24
第3章 電子部品を使ってみよう	27
3.1 部品説明	27
LED	27
ジャンプワイヤ	29
抵抗	30
タクトスイッチ	31
3.2 Lチカしよう！	33
プログラムでLチカ	34
タクトスイッチでLチカ	36

チャタリング	39
3.3 応用問題: 状態遷移	39
応用問題解答	41
第4章 センサのデータを Web 上に公開しよう	45
4.1 センサを使おう	45
4.2 Web に公開しよう	52
Wi-FI と接続する	52
Ambient	53
Ambient にデータを送る	56
第5章 WebAPI を使おう	61
WebAPI とは?	61
5.1 Weather API を使う	61
HTTP とは	66
ESP32 で JSON を利用する	72
Weather API からデータを取得する	77
5.2 ディスプレイを使う	81
I2C (Inter-Integrated Circuit) とは	82
ディスプレイの表示	83
5.3 Weather API から得たデータをディスプレイに表示	86
5.4 DHT11 で得たデータをディスプレイに表示	90
5.5 応用問題: 時計を表示してみる	93
第6章 応用編	96
6.1 Web サーバからのリクエスト	96
6.2 2 台の ESP32 を使ってピンポンする	96
6.3 VScode から ESP32 にスケッチを書き込む	96
付録 A トラブルシューティング	104
A.1 シリアルモニタで文字化けがする	104
A.2 プログラムが書き込めない	104
A.3 プログラムが反映されない	104
A.4 error: redefinition	105
A.5 接続ポートに ESP32 が反映されない	106
A.6 COM ポートがデバイスマネージャーに表示されない	108
A.7 うまく書き込めない	109
A.8 LED の光り方が弱い	109
A.9 回路図どうりなのにつかない	109

著者紹介	110
------	-----

第1章 電子部品の準備

本章では本誌のサンプルを進めるにあたって必要な電子部品および、その購入方法について紹介します。

1.1 電子部品の購入の方法

電子部品の販売店が近くにあれば直接商品を見ながら購入するのが一番ですが、お店が近くになかったり、コロナ渦の問題などで直接行くことが難しい場合は、通販での購入をおすすめします。下記の5つは電子部品を通販で購入できるサイトです。特に秋月電子通商、千石電商そしてaitendoは秋葉原に店舗があるので、機会があれば行くことをおすすめします。

- 秋月電子通商
 - <https://akizukidenshi.com/catalog/>
- 千石電商
 - <https://www.sengoku.co.jp/>
- スイッチサイエンス
 - <https://www.switch-science.com/>
- Amazon
 - <https://www.amazon.co.jp/>
- aitendo
 - <https://www.aitendo.com/>

1.2 本誌で利用する電子部品

筆者が本誌に使用するサンプルを作成するにあたって購入した商品を紹介します（表1.1）。本誌のサンプルを進めるにあたって必要になるため、参考にしてください。

表 1.1 必要な材料

品名	個数	参考価格	詳細情報
ESP32DevKitC	1 個	1230 円	
microUSB Type-B	1 本	約 300 円	
プレッドボード	2 個	280 円	2
LED	1 袋	150 円	
ジャンプワイヤセット(オス・オス)	1 セット	220 円	
抵抗 100 & 10k	100 : 1 袋 10k : 1 袋	100 円	2
タクトスイッチ	1 個	10 円	
温湿度センサ	1 個	300 円	
ディスプレイ	1 個	580 円	
計		約 3550 円	

おすすめ製品

今回筆者はすべて秋月の通販にて電子部品を購入をしましたが、同じ製品であればどの店舗で購入しても差し支えありません。しかし、本誌は以下の製品で動作確認をしているため基本的には以下の製品を購入することをおすすめします。

ESP32DevKitC

ESP32 - DevKitC - 32E ESP32 - WROOM - 32E 開発ボード 4 MB

<https://akizukidenshi.com/catalog/g/gM-15673/>

プレッドボード

プレッドボード 6穴版 EIC - 3901

<https://akizukidenshi.com/catalog/g/gP-12366/>

備考: ESP32DevKitC は幅が広いため、6穴のプレッドボードを使うことをおすすめします。

LED

5mm赤色LED 625nm 7cd 60度 (10個入)

<https://akizukidenshi.com/catalog/g/gI-01318/>

ジャンプワイヤセット（オス・オス）

ブレッドボード・ジャンパーウイヤ（オス - オス）セット 各種 合計 60 本以上

<https://akizukidenshi.com/catalog/g/gC-05159/>

抵抗

カーボン抵抗（炭素皮膜抵抗） 1 / 4W 10 k (100本入)

<https://akizukidenshi.com/catalog/g/gR-25103/>

カーボン抵抗（炭素皮膜抵抗） 1 / 4W 100 (100本入)

<https://akizukidenshi.com/catalog/g/gR-25101/>

備考: 上記の抵抗は 100 本単位からしか購入できません。実際に使用するのはどちらの抵抗値とも 3 本以下なので必ずしも 100 本買う必要はありません。

タクトスイッチ

タクトスイッチ（緑色）

<https://akizukidenshi.com/catalog/g/gP-03651/>

備考: 色の選択は自由です。

温湿度センサ

温湿度センサ モジュール DHT11

<https://akizukidenshi.com/catalog/g/gM-07003/>

ディスプレイ

0.96 インチ 128 × 64 ドット有機ELディスプレイ（OLED）白色

<https://akizukidenshi.com/catalog/g/gP-12031/>

第2章 環境構築

この章では ESP32 にプログラムを書き込む際に必要な環境構築の手順を紹介します。本誌は、Windows 環境を想定しており Mac 環境の方は手順が異なる可能性があります。

2.1 ESP32 とは

ESP32 とは Espressif Systems 社が開発した SoC(System on a Chip)シリーズの名前です。ESP32 という名前の使われ方には様々あり今回使用する ESP32DevKitC-32E (図 2.1) は、ESP32 をユーザが利用しやすい形にした製品ですが、通称として ESP32 と呼ばれことがあります。そのため、本誌では ESP32DevKitC-32E も含めて ESP32 と呼んでいます。ESP32 の特徴としては Bluetooth や Wi-Fi モジュールがついている点やマルチコアな点が挙げられます。

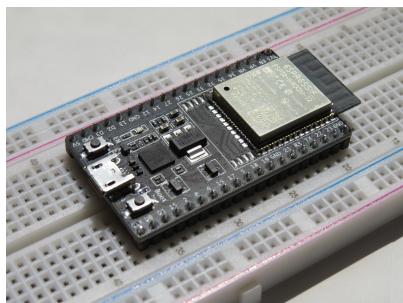


図 2.1 ESP32DevKitC-32E

2.2 ESP32 の開発環境

ESP32 の開発環境には主に以下の 3 つが挙げられます。

- Arduino IDE
 - Arduino 互換ボード用統合開発環境 (C/C++)
- ESP-IDF
 - ESP32 専用の開発環境 (C/C++)

- MicroPython
 - C 言語で作られた Python3 と互換性がある言語処理系

今回は利用者が多く、関連情報がネット上に多く見られる Arduino IDE を用いて開発を進めていきたいと思います。

2.3 Arduino IDE のインストール

Arduino IDE をインストールするために以下のリンクにアクセスしてください。

<https://www.arduino.cc/en/software>

ダウンロード画面（図 2.2）ではご自身の PC 環境にあったダウンロードリンクを選択してください。ここからの手順では、Windows10 でのダウンロードを想定しています。

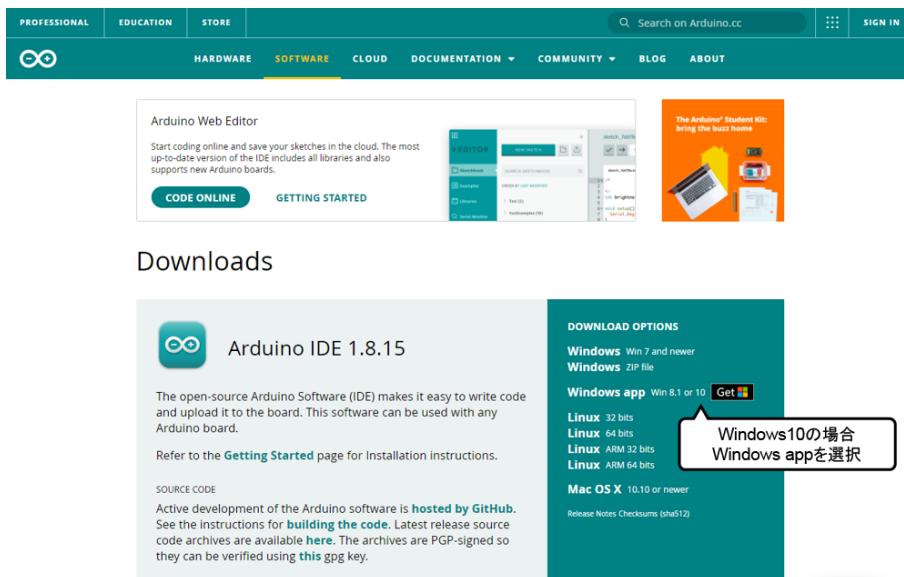


図 2.2 Arduino IDE のダウンロード画面

ダウンロードリンクにアクセスすると、寄付金の金額選択画面に遷移します（図 2.3）。可能であれば寄付もできますが、JUST DOWNLOAD を選択することでつぎの画面に遷移します。

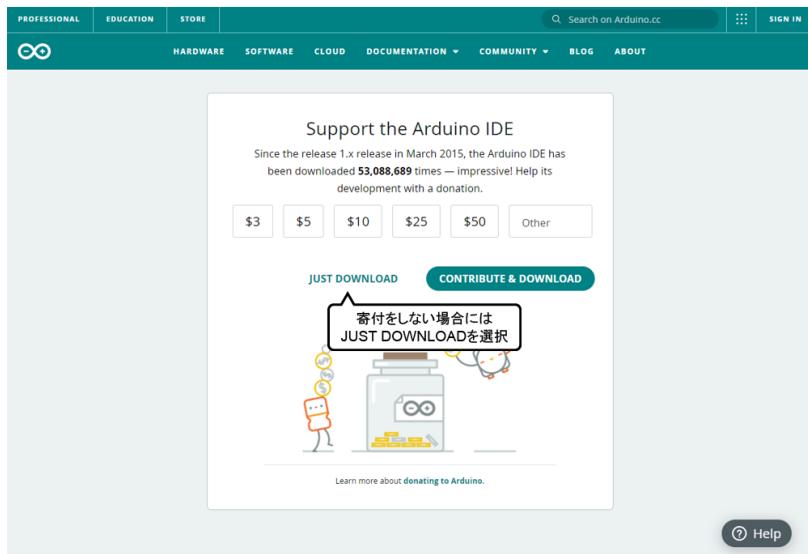


図 2.3 寄付金の金額選択画面

JUST DOWNLOAD を選択するとブラウザ内で MicrosoftStore の画面に遷移します(図 2.4)。つぎに入手を選択すると、ブラウザのポップアップが表示され Windows 上で MicrosoftStore を開く許可を求めるので許可を選択してください。

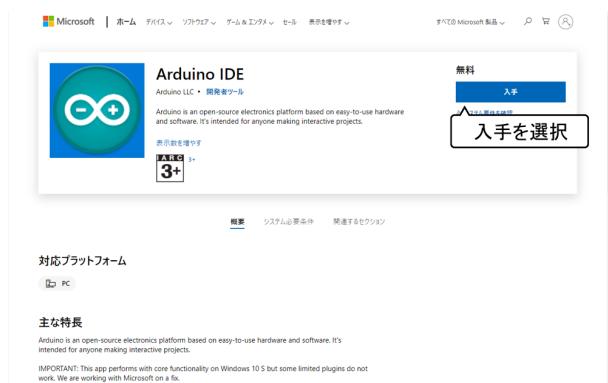


図 2.4 ブラウザで見る MicrosoftStore

Windows 上で開かれた MicrosoftStore です(図 2.5)。再度、入手を選択してください。

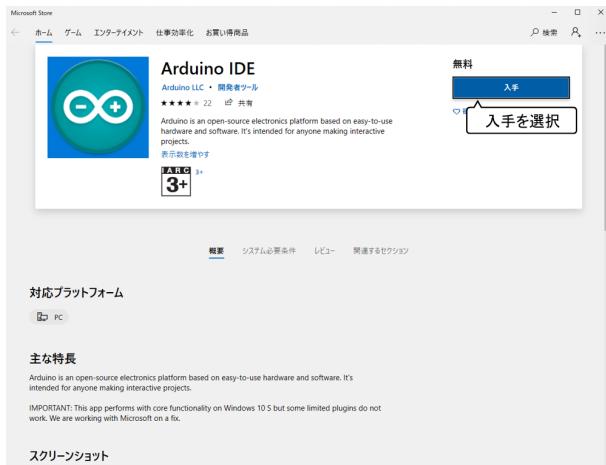


図 2.5 Windows で開いた MicrosoftStore

サインインについて尋ねられますが（図 2.6）必要ありませんを選択した場合もダウンロードは開始されます。



図 2.6 サインインの確認画面

図 2.7 では Arduino IDE のダウンロード状況を確認できます。



図 2.7 ダウンロードのキュー画面

ダウンロードが完了した後、検索窓にて Arduino IDE を検索し開いてください(図 2.8)。

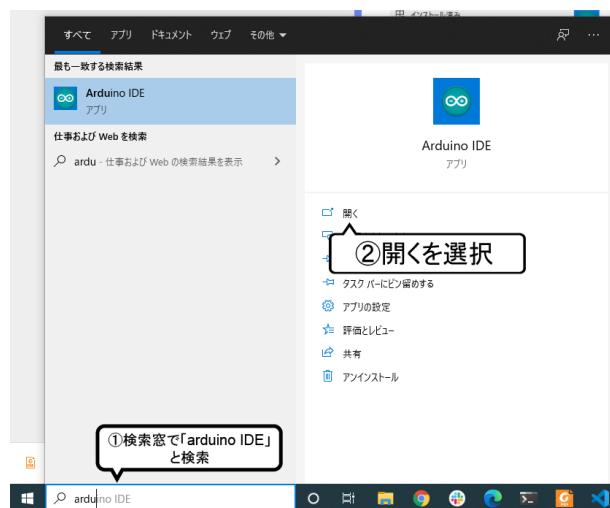


図 2.8 ArduinoIDE の検索

開いた際、セキュリティについての許可を求められるので(図 2.9)アクセスを許可するを選択してください。

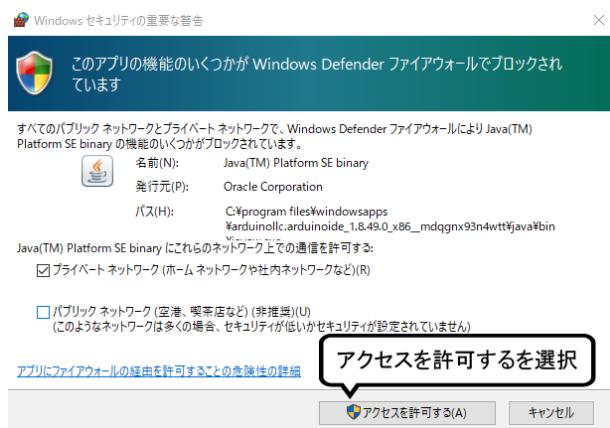


図 2.9 セキュリティの確認画面

Arduino IDE が起動すると、デフォルトの画面が表示されます（図 2.10）。

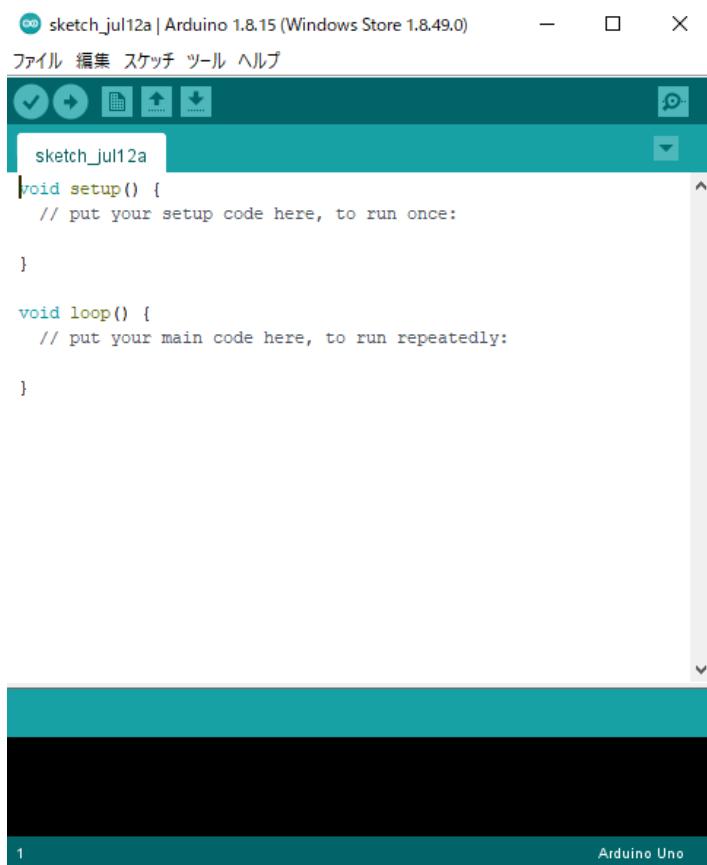


図 2.10 デフォルトのスケッチ画面

以上で Arduino IDE のインストールは完了です。

2.4 ESP32 用ボードマネージャーのインストール

Arduino IDE にて ESP32 を使うために必要なボードマネージャーのインストール方法を紹介します。

図 2.11 は ESP32 のボードマネージャーを追加するための手順であり、以下のリンクに記載されています。

https://github.com/espressif/arduino-esp32/blob/master/docs/arduino-ide/boards_manager.md

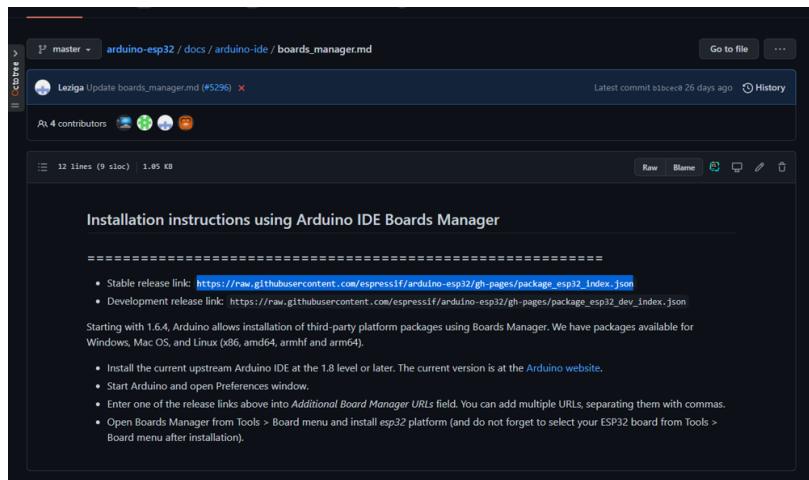


図 2.11 ESP32 を ArduinoIDE で使うための設定

手順に従い以下のリンクをコピーしてください（リスト 2.1）。以下のリンクには、図 2.12 のような情報が記載されています。以下のリンクでは改行をしていますが実際は一文のため注意してください。

リスト 2.1: ボードマネージャーのリンク

```
https://raw.githubusercontent.com/espressif/arduino-esp32/gh-pages/package_esp32_in
```



```
{
  "packages": [
    {
      "name": "esp32",
      "maintainer": "Espressif Systems",
      "websiteURL": "https://github.com/espressif/arduino-esp32",
      "email": "christophe@espressif.com",
      "help": {
        "online": "http://esp32.com"
      },
      "platforms": [
        {
          "name": "esp32",
          "architecture": "esp32",
          "version": "1.0.5",
          "category": "ESP32",
          "url": "https://github.com/espressif/arduino-esp32/releases/download/1.0.5/esp32-1.0.5.zip",
          "arch": "esp32",
          "file": "esp32-1.0.5.zip",
          "checksum": "SHA-256:389d3aa181d6c0b492dd4c982b022ecc01e3aa0cb70420cc3cb4550b",
          "size": "91128882",
          "help": {
            "online": ""
          }
        }
      ],
      "boards": [
        {
          "name": "ESP32 Dev Module"
        },
        {
          "name": "Renesas LoLin32"
        },
        {
          "name": "Renesas D1 MINI ESP32"
        }
      ],
      "toolDependencies": [
        {
          "packager": "esp32",
          "name": "firmware-esp32-elf-gcc",
          "version": "1.22.0-97-gf52ad5-5.2.0"
        },
        {
          "packager": "esp32",
          "name": "espota_lpy",
          "version": "3.0.0"
        },
        {
          "packager": "esp32",
          "name": "espiffls",
          "version": "1.0.0"
        }
      ]
    }
  ]
}
```

図 2.12 ESP32 用のボードマネージャ情報

Arduino IDE 側では、(ファイル > 環境設定) を選択してください (図 2.13)

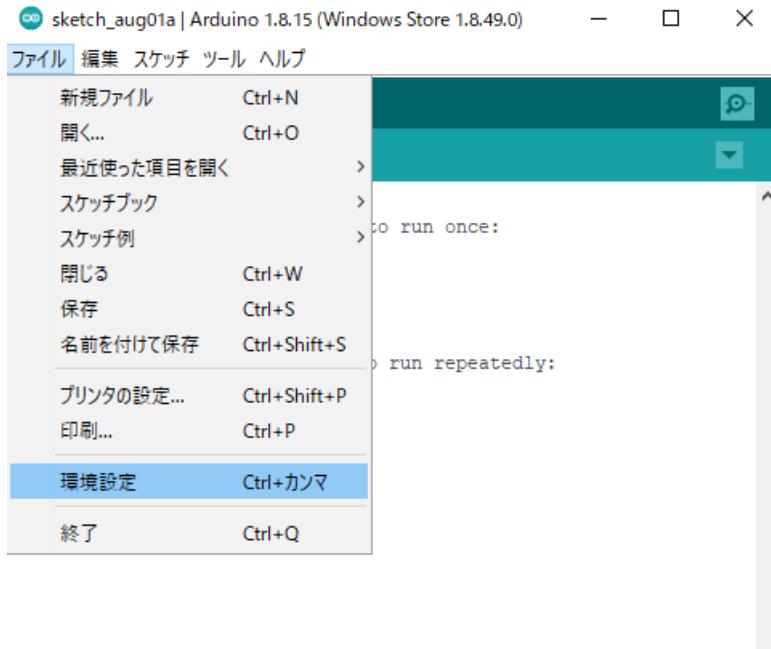


図 2.13 環境設定を選択

選択した後、環境設定の画面が表示されていることを確認してください（図 2.14）。



図 2.14 環境設定の画面

次に、先ほどコピーしたリンク（リスト 2.1）を追加ボードマネージャーの URL の欄にペーストしてください（図 2.15）。



図 2.15 追加ボードマネージャーの URL に貼り付ける

その後、OK を選択してください。

次に、（ツール > ボード > ボードマネージャー）を開いてください。

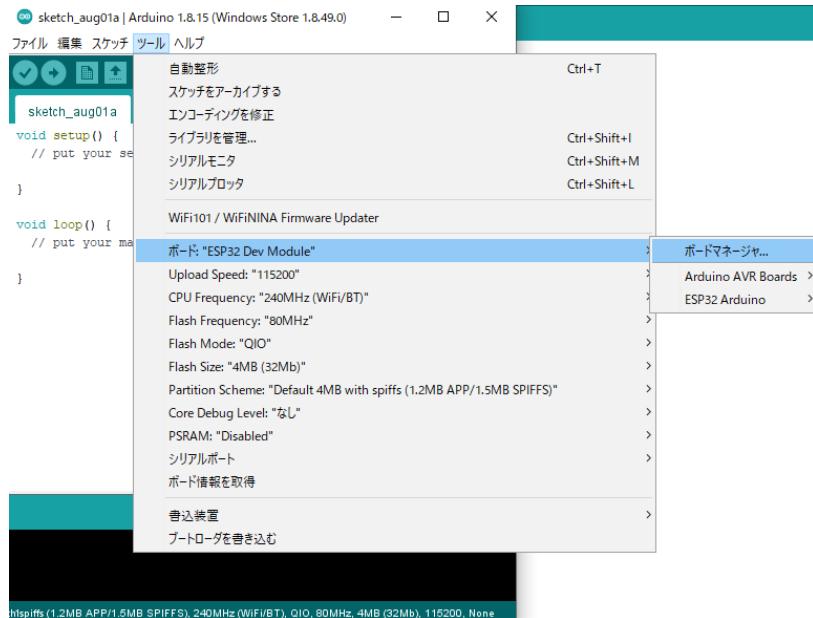


図 2.16 ボードマネージャーを開く

開かれたボードマネージャーの検索窓に「ESP32」を入力しインストールをしてください。

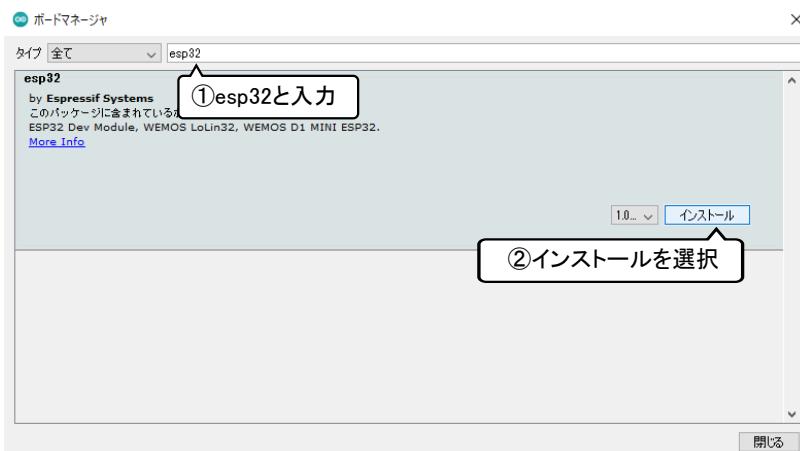


図 2.17 ESP32 用ボードマネージャーのインストール

インストールが完了した後、(ツール > ボード > ESP32 Arduino > ESP32 Dev Module)を選択してください。

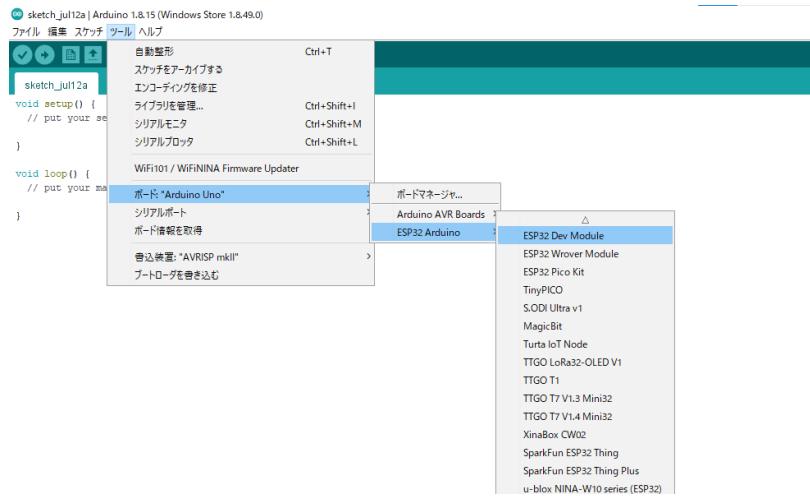


図 2.18 ボード ESP32 Dev Module の選択

2.5 Hello ESP32!!

ここで動作確認をするためにプログラミングでは定番の HelloWorld を ESP32 でやってみましょう。

ブレッドボード

これからのかたのために ESP32 をブレッドボードにさします。図 2.19 のように、esp32 をブレッドボード中央あたりに差し込んでください。ブレッドボードの説明をします。ブレッドボードは電子回路を仮組みする際によく使われます。ブレッドボードにさした部品は再利用できるため、いろいろな回路を試すことができます。ブレッドボードの最大の特徴として図 2.19 のように、回路的につながっている部分とつながっていない部分に分かれているところがあげられます。最初のうちは、回路的につながっている黄色の部分を忘れて、ショートする回路を作ってしまうことがあるので注意してください。

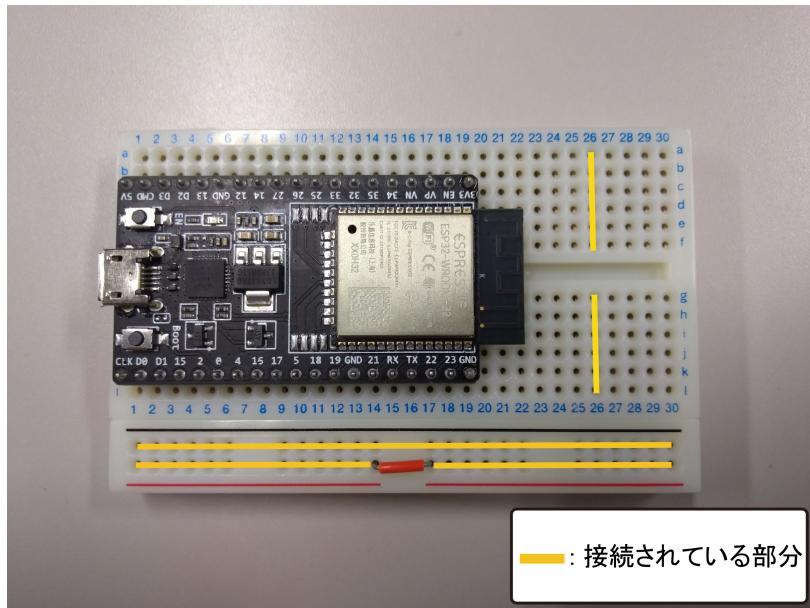


図 2.19 ブレッドボード

PC との接続

つぎに、ESP32 を PC と接続します。まず microUSB Type-B の差し込み口に（図 2.20）microUSB Type-B 端子を差し込んでください。

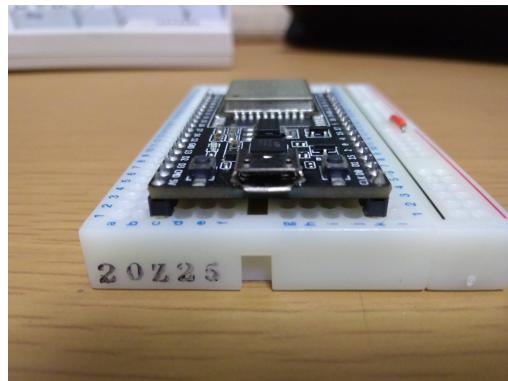


図 2.20 microUSB type-B 差し込み口

その後、PC と esp32 を接続してください。接続が完了すると esp32 上の LED が光ります（図 2.21）。

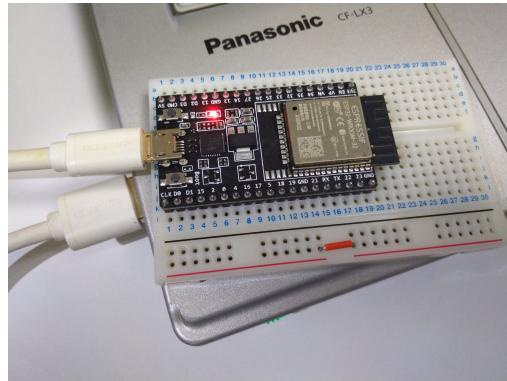


図 2.21 PC との接続

次にデバイスマネージャーを用いて、ESP32 がつながっているポート番号を調べます。デバイスマネージャーを開いてください（図 2.22）。



図 2.22 デバイスマネージャーの検索

ESP32 は Silicon Labs CP210x USB to UART Bridge という名前で COM3 につながっていることがわかります（図 2.23）。接続ポートは環境によって異なります。接続ポートに ESP32 にがない場合は「A.5 接続ポートに ESP32 が反映されない」を参照してください。

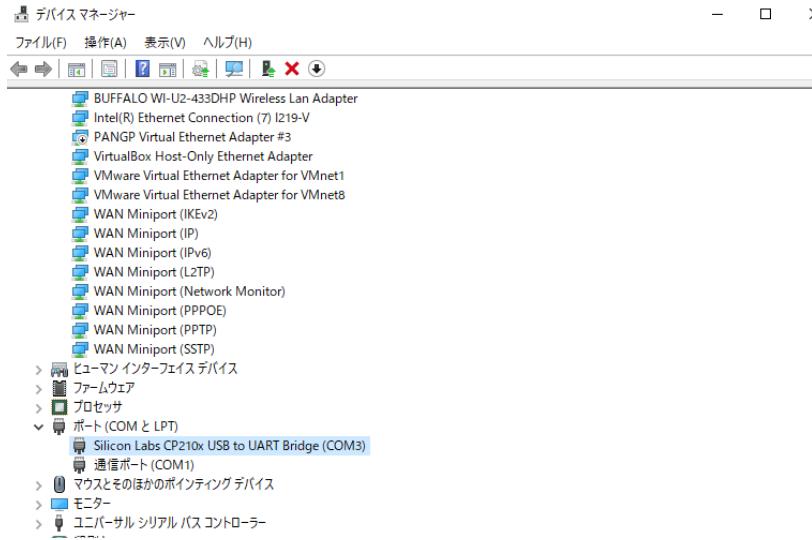


図 2.23 ESP32 の接続ポートを調べる

先ほど調べた接続ポートを反映するため ツール>シリアルポートを選択し変更してください。

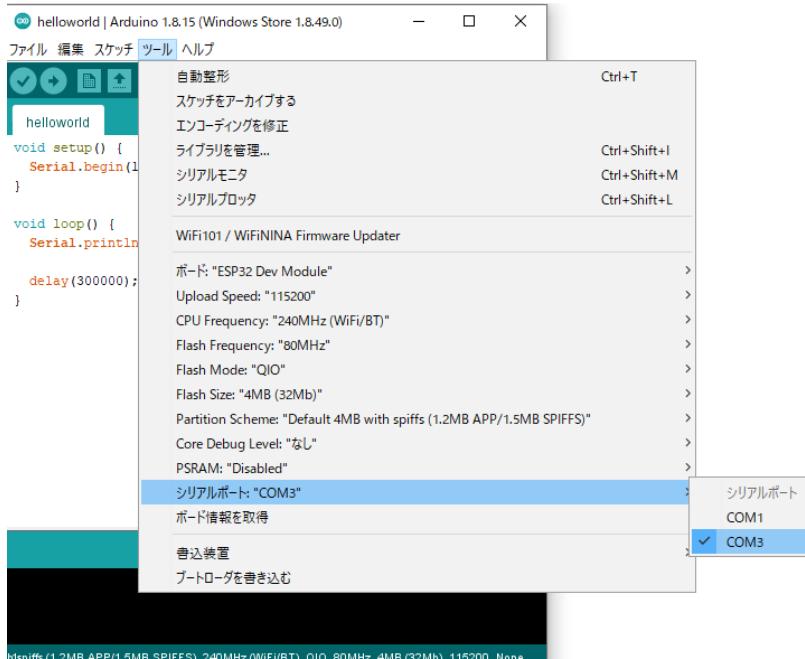


図 2.24 接続ポートの反映

設定を確認します。ツールを開いて UploadSpeed が 115200 であることを確認してください。

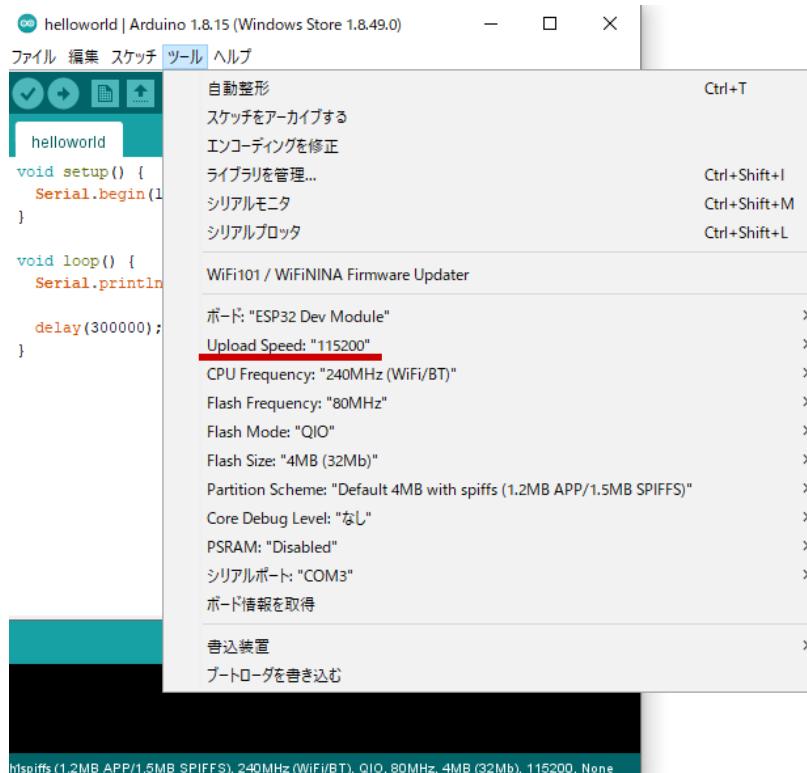


図 2.25 ボードの設定

プログラムの記述

HelloWorld を実行するため、新しくファイルを作成します。ファイル>新規ファイルを選択してください（図 2.26）。

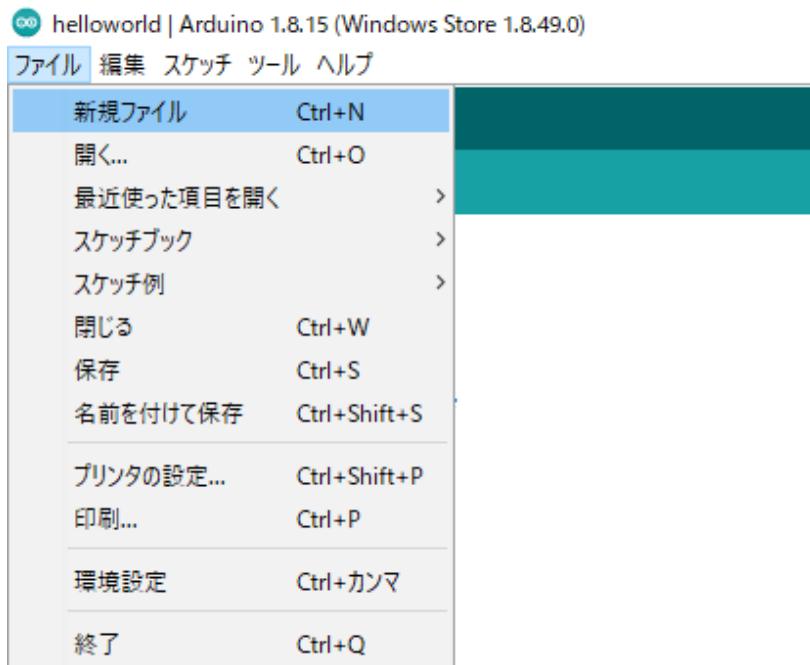


図 2.26 新規ファイルの作成

ファイルエクスプローラーが開かれるので、ファイル名に helloworld と入力して保存してください（図 2.27）。

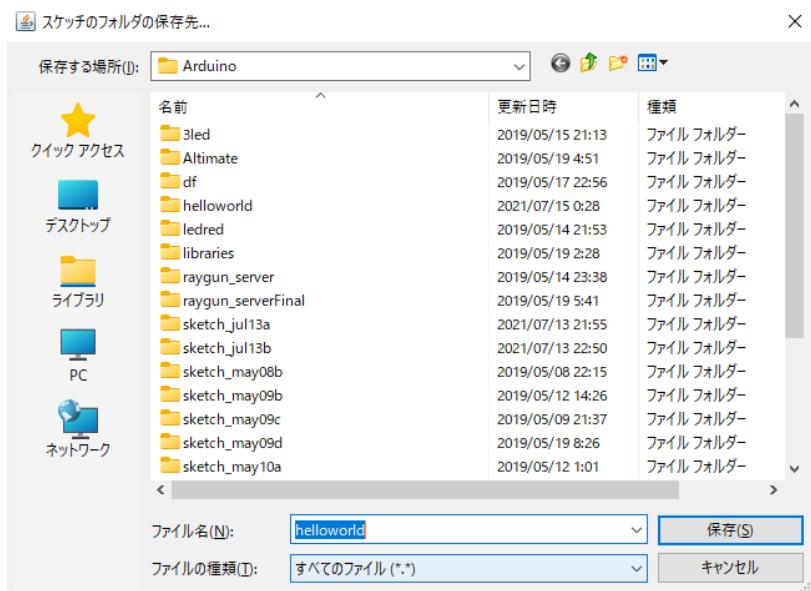


図 2.27 新規ファイルの名前決定

つぎに、リスト 2.2 を参考にして図 2.28 のようにプログラムを記述してください。

リスト 2.2: HelloWorld

```

void setup() {
    Serial.begin(115200); // シリアル通信をUploadSpeed 115200bpsで開始
}

void loop() {
    Serial.println("Hello,World"); // シリアル通信で"Hello,World"を送信する
    delay(3000); // 3000ms (3秒) 停止する
}

```

**図 2.28** HelloWorld のプログラムを記述**プログラムの説明**

ここで、先ほど記述したプログラムの説明をします。まず、ESP32 のプログラムは大枠として

- `setup()`
- `loop()`

の二つに分類されます。setup() は起動時に一回だけ実行され、loop() は setup() の実行後、無限に繰り返されます。そのため、setup() 内には初期化などの処理を書き、loop() 内にはセンサーの値取得など逐次取得したい内容を書きます。

プログラムの書き込み

ここで、esp32 にプログラムを書き込みます。矢印を選択し、プログラミングを書き込んでください（図 2.29）。



図 2.29 ESP32 にプログラムを書き込む

矢印を選択するとプログラムの書き込みが開始します。書き込みの様子はコンソール画面にて確認できます（図 2.30）。

The screenshot shows the Arduino IDE interface. The top menu bar includes 'ファイル' (File), '編集' (Edit), 'スケッチ' (Sketch), 'ツール' (Tools), and 'ヘルプ' (Help). The main window displays the code for 'helloworld':

```

void setup() {
    Serial.begin(115200);
}

void loop() {
    Serial.println("Hello,World");

    delay(300000);
}

```

Below the code, a message says 'ボードへの書き込みが完了しました。' (Writing completed). The serial monitor output shows the process of writing the sketch to memory:

```

Writing at 0x00020000... (71 %)
Writing at 0x00024000... (85 %)
Writing at 0x00028000... (100 %)
Wrote 204608 bytes (106238 compressed) at 0x00010000 in 9.4 seconds (effective 173.3 kbit/s)...
Hash of data verified.
Compressed 3072 bytes to 128...
Writing at 0x00008000... (100 %)
Wrote 3072 bytes (128 compressed) at 0x00008000 in 0.0 seconds (effective 1170.3 kbit/s)...
Hash of data verified.

Leaving...
Hard resetting via RTS pin...

```

The status bar at the bottom indicates: '32 Dev Module, Disabled, Default 4MB with spiffs (1.2MB APP/1.5MB SPIFFS), 240MHz (WiFi/BT), QIO, 80MHz, 4MB (32Mb), 115200, None'.

図 2.30 コンソール画面

動作確認

ESP32 からの HelloWorld を表示するために、シリアルモニタを開きます。ツール > シリアルモニタを選択してください（図 2.31）。

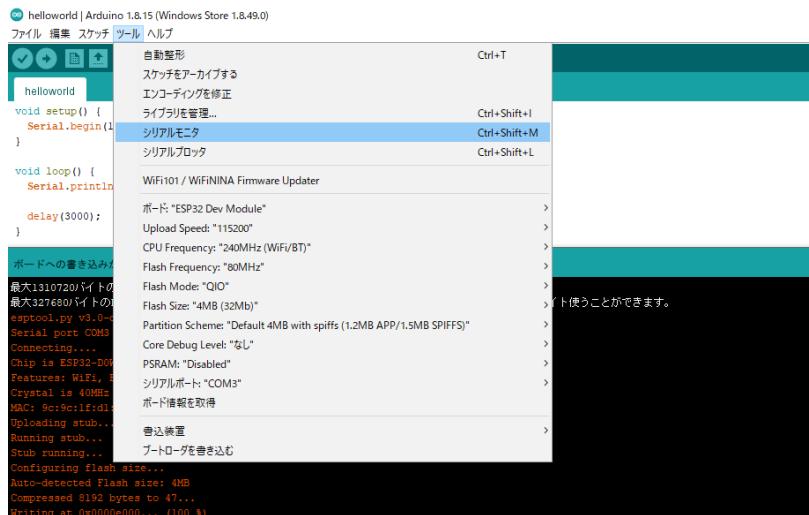


図 2.31 シリアルモニタの選択

ESP32 から HelloWorld が送られてくることを確認できました（図 2.32）。

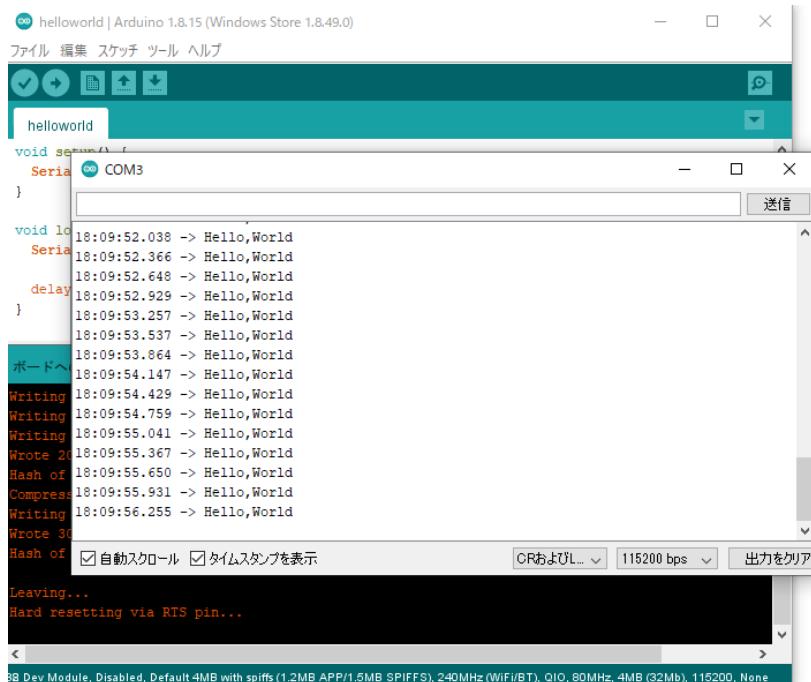


図 2.32 helloworld の表示成功

シリアル通信とは

シリアル通信とは通信線を用いて信号を HIGH と LOW の 1/0 の組み合わせの連続（シリアル）的に情報を送信するものです。HelloWorld を受信した際に使用したシリアルモニタは ESP32 から送られてきた情報を表示したり送信したりする機能です。またシリアル通信では送信速度と受信速度を一致させる必要があります、これを一秒あたりのビット数（bps）として表します。プログラムで記載した

```
Serial.begin(115200);
```

も esp32 と PC との間の通信速度を 115200bps として設定しています。ほかにも

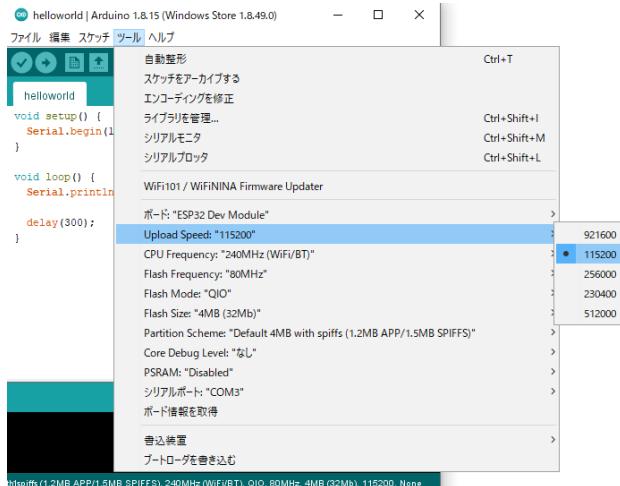


図 2.33 UploadSpeed の設定

設定の UploadSpeed (図 2.33) や

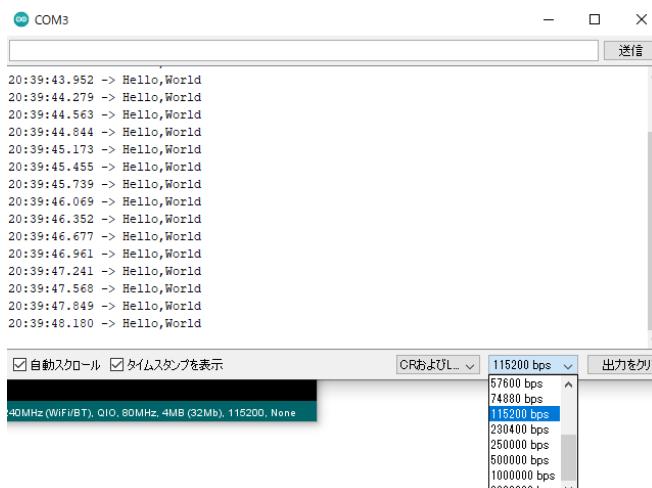


図 2.34 シリアルモニタの bps の設定

シリアルモニタでの設定（図2.34）も一致する数字にする必要があります。ちなみにUSBもUniversal Serial Busの略であり、シリアル通信を行っています。

第3章 電子部品を使ってみよう

3.1 部品説明

ESP32で電子部品を用いた回路を組む前に、それぞれの部品の概要を紹介します。

LED

LED（発光ダイオード）は決まった方向に電圧を加えることで、発光する半導体素子です。LEDには極性があり、以下の二つに分けられます（図3.1）。

- アノード
 - 端子の長いほうをアノードと呼び電源の+に接続する
- カソード
 - 端子の短いほうをカソードと呼ぶGND（マイナス）に接続

極性を逆に繋ぐと光らないので注意してください。

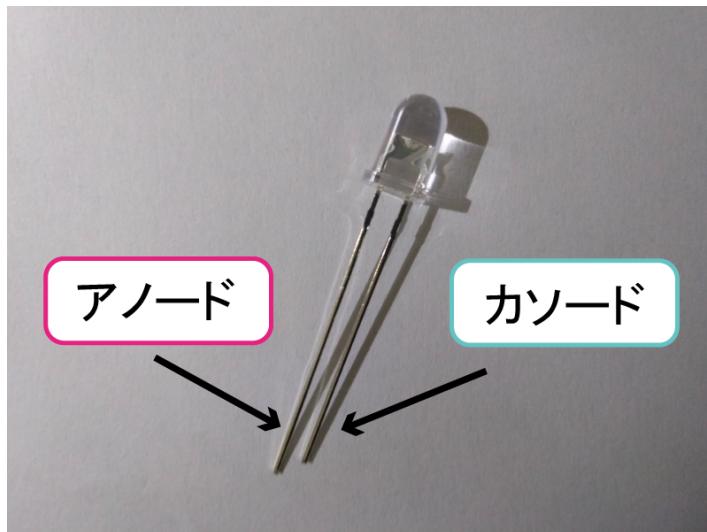


図3.1 LEDの端子の違い

ちなみに電流を流しすぎると下記の画像（図3.2）の右側LEDのように燃えて使え

なくなってしまいます。



図3.2 燃えてしまったLED

極性のほかにも点灯のために必要な情報があり、代表的なものに以下の二つがあります。

- 順電圧 (Vf)
 - LEDは発光するため一定値以上の電圧をかける必要があります。これを順電圧 (Vf)と呼びます。
- 順電流 (If)
 - LEDは流す電流の大きさによって明るさが変わりますが、電流を流しすぎると壊れてしまいます。そこで順電流 (If)を用いて適切な電流値を表します。

抵抗値の求め方

先述の二つを用いてLEDとESP32の間に接続する抵抗値の選択をします。今回使うLEDは

順電圧 (Vf) : 2.1V 順電流 (If) : 20mA です。

まずLEDにかかる抵抗にかかる電圧を求めます。GPIOから出力される電圧は3.3V、LEDにかかる電圧は順電圧を用いて2.1Vとします。そこからLEDにかかる電圧を求める

$$3.3V - 2.1V = 1.2V$$

より1.2Vが抵抗にかかる電圧だと分かりました。次に抵抗にかかる電流値を求めます。ESP32のGPIOにかけてもいい最大電流値は20mA(おそらく)なのでオームの法則を用いて抵抗値を求める

$$1.2V / 0.02A = 60$$

60 が必要ということが分かりました。しかし、今回は 100 の抵抗を用意したので

$$1.2V / 100 = 0.012A(12mA)$$

より 100 の抵抗を使っても流れる電流は 12mA であり ESP32 の許容範囲内です。

ジャンプワイヤ

主にブレッドボード上で、電子回路を仮組する際に使われるものがジャンプワイヤです。ジャンプワイヤには、いくつかの種類があり主に以下の二つがあります。

- オス・オス
 - 両端子とも基盤にさして使う（図 3.3）
- オス・メス
 - 片方が端子を差し込めるようになっている（図 3.4）



図 3.3 ジャンプワイヤ オス・オス



図 3.4 ジャンプワイヤ オス・メス

抵抗

電子回路上を流れる電流を調整するために使われるのが抵抗であり（図3.5）、抵抗値によって様々なものがあります。これを見分けるための規格があり以下のように決められています（表3.1）。

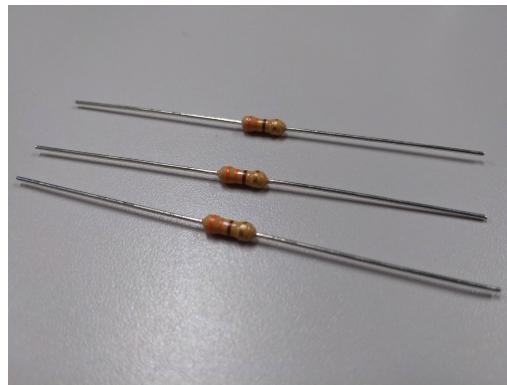


図3.5 330 抵抗

許容差とは抵抗のばらつき度を表しています。

表3.1 抵抗のカラーコード

色	有効数字	乗数	許容差 [%]
黒	0	$10^0(1)$	
茶	1	$10^1(10)$	±1
赤	2	$10^2(100)$	±2
オレンジ	3	$10^3(1000)$	±0.05
黄	4	$10^4(10000)$	
緑	5	$10^5(100000)$	±0.5
青	6	$10^6(1000000)$	±0.25
紫	7	$10^7(10000000)$	±0.1
灰	8	$10^8(100000000)$	
白	9	$10^9(1000000000)$	
金		$10^{-1}(0.1)$	±5
銀		$10^{-2}(0.01)$	±10
無色			±20

実際に抵抗の値をカラーコードから読み取ってみましょう。図 3.6 を見てください。今回は 4 本線の場合を考えます。まず左側の二つの線の色を見るとどちらもオレンジなので表 3.1 から 33 ということが分かります。次に右側の二つ線の色を見ると茶色と金色なので乗数が 10 許容差が $\pm 5\%$ ということが分かります。これらのことから、この抵抗は抵抗値 330Ω で許容差 $\pm 5\%$ だということが分かりました。

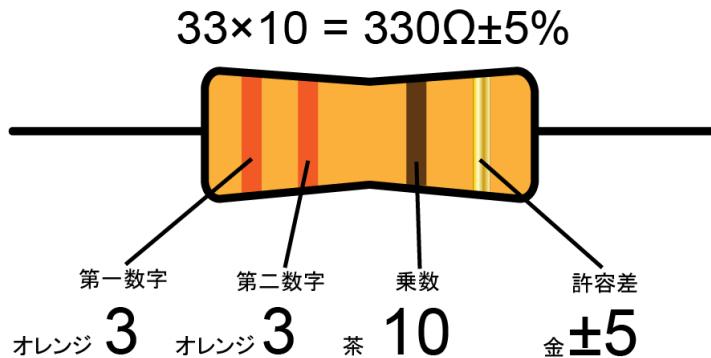


図 3.6 抵抗値の読み取り

タクトスイッチ

タクトスイッチはスイッチを押すことで、電流の止めたり流したりできる部品です。主にプログラムのリセットやメッセージ送信スイッチなどに使われます。



図 3.7 タクトスイッチ

タクトスイッチには通常時繋がっている部分と繋がっていない部分があります。図3.8を見てもらうと分かるように黄色の線の部分は通常時繋がっていて、オレンジ色の線の部分はタクトスイッチを押すと繋がります。

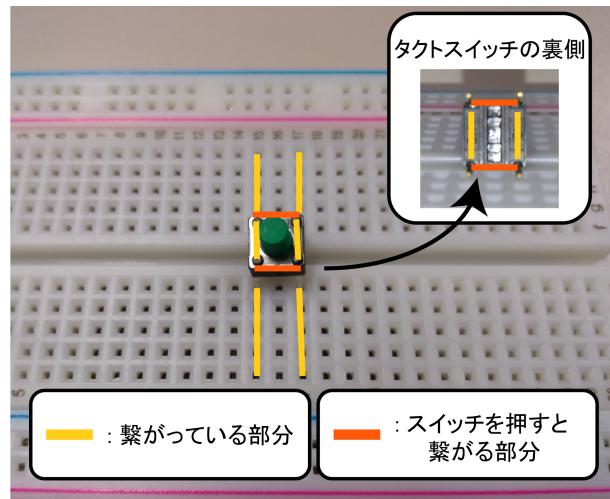


図3.8 タクトスイッチの特徴

プルアップとプルダウン

タクトスイッチなどのスイッチを用いることで、電流を流したり止めたりすることができます。しかし、出力する端子に何もつながっていない状況（図3.9）では不安定になってしまいノイズなどの影響を受けやすくなってしまいます。そこで、これを解決するために以下の二つの方法を用います（図3.10）。

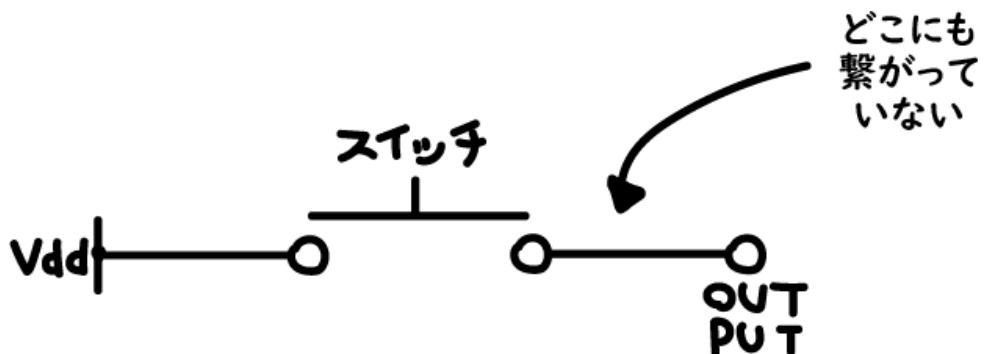


図3.9 オフ状態のスイッチ

まず前提として、Vdd は電気の + 側を GND は電気の - 側を表しています。また OUT PUT は ESP32 でいうところの入出力が可能なピンである GPIO (General Purpose Input/Output: 汎用入出力) をさしています。

まず図 3.10 の左側に記載してある PULL UP は常に OUT PUT に電圧をかけ、スイッチが押された際には OUT PUT への電圧が 0 になる回路です。これによりノイズの影響を少なくしています。

つぎに図 3.10 の右側に記載してある PULL DOWN は OUT PUT を GND につないでおくことでかかる電圧を 0 に維持しています。スイッチが押された際には電圧が OUT PUT にかかります。これによりノイズの影響を少なくしています。

これら二つの方法を用いることで安定した回路を組むことができます。

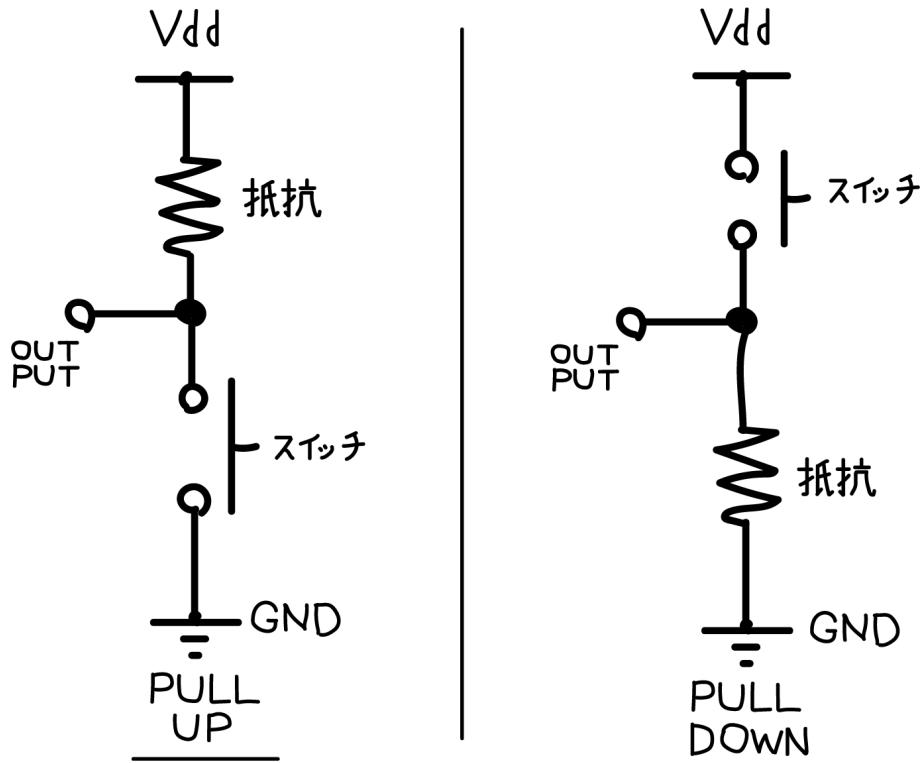


図 3.10 PULL UP と PULL DOWN

3.2 L チカしよう！

L チカとは、さまざまな言語のプログラムでの HelloWolrd に相当するハードウェア操作のプログラムです。LED をチカチカ点滅させてみましょう！！

プログラムでLチカ

Lチカですが、ESP32を使用することで容易に実現できます。Arduino IDEから新規作成を選択し、新たなファイルを作成して以下のプログラムを貼り付けてください（リスト3.1）。回路図ではブレッドボードを二枚用いていますが（図3.11）、今回使用するブレッドボードでは一枚の中に収まるようになっています（図3.12、図3.13）。

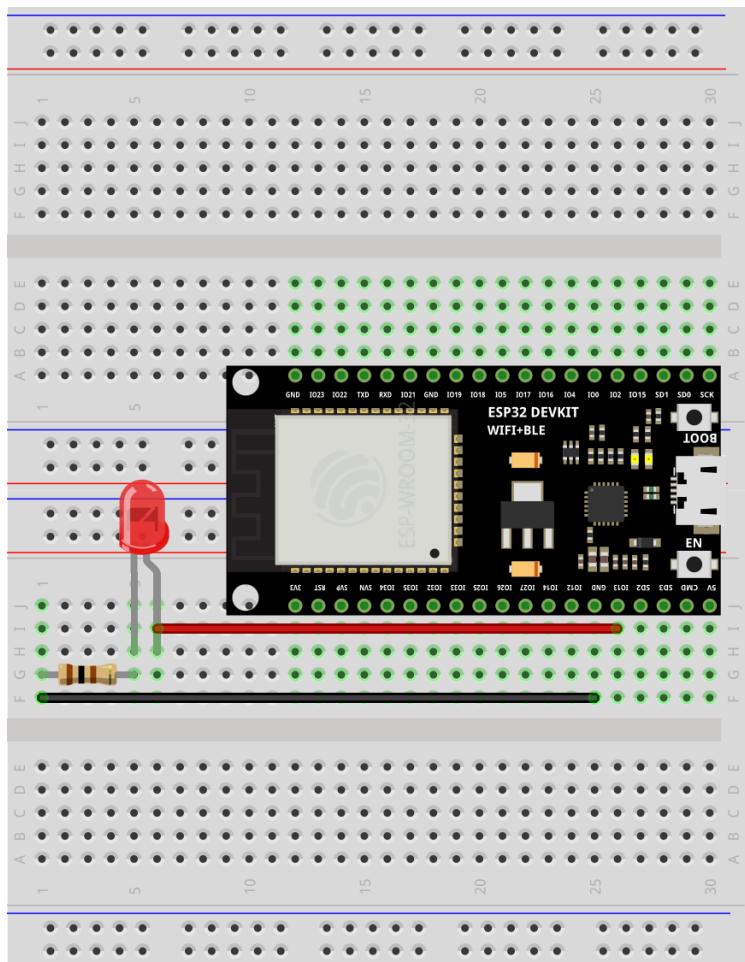


図3.11 Lチカの回路図

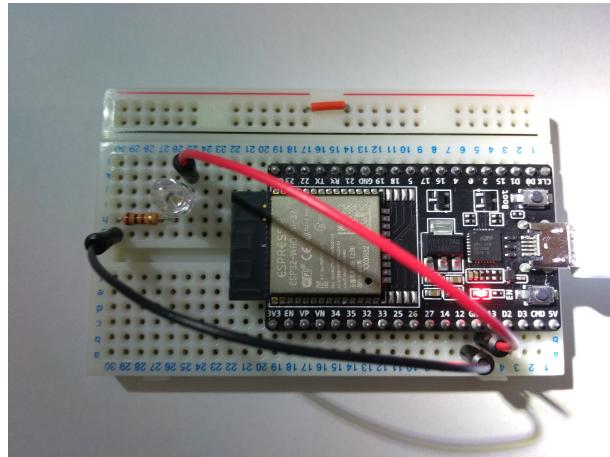


図 3.12 L チカの回路を配置した図

リスト 3.1: L チカのプログラム

```
void setup() {
    pinMode(13, OUTPUT); // GPIO13を出力端子として用いる
}
void loop() {
    digitalWrite(13, HIGH); // GPIO13に電流を流しLEDを光らせる
    delay(100); // 0.1s停止
    digitalWrite(13, LOW); // GPIO13の電流を止める
    delay(100); // 0.1s停止
}
```

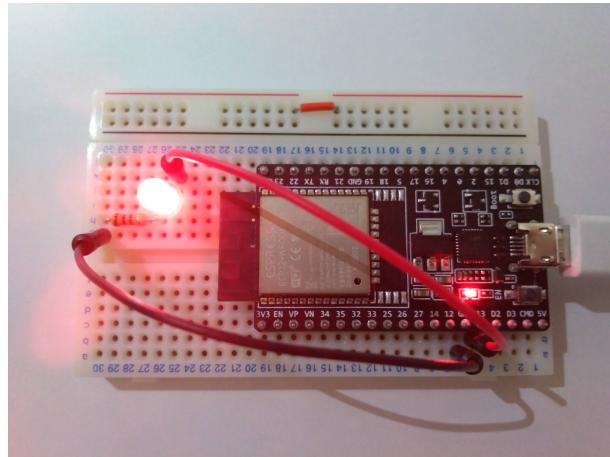
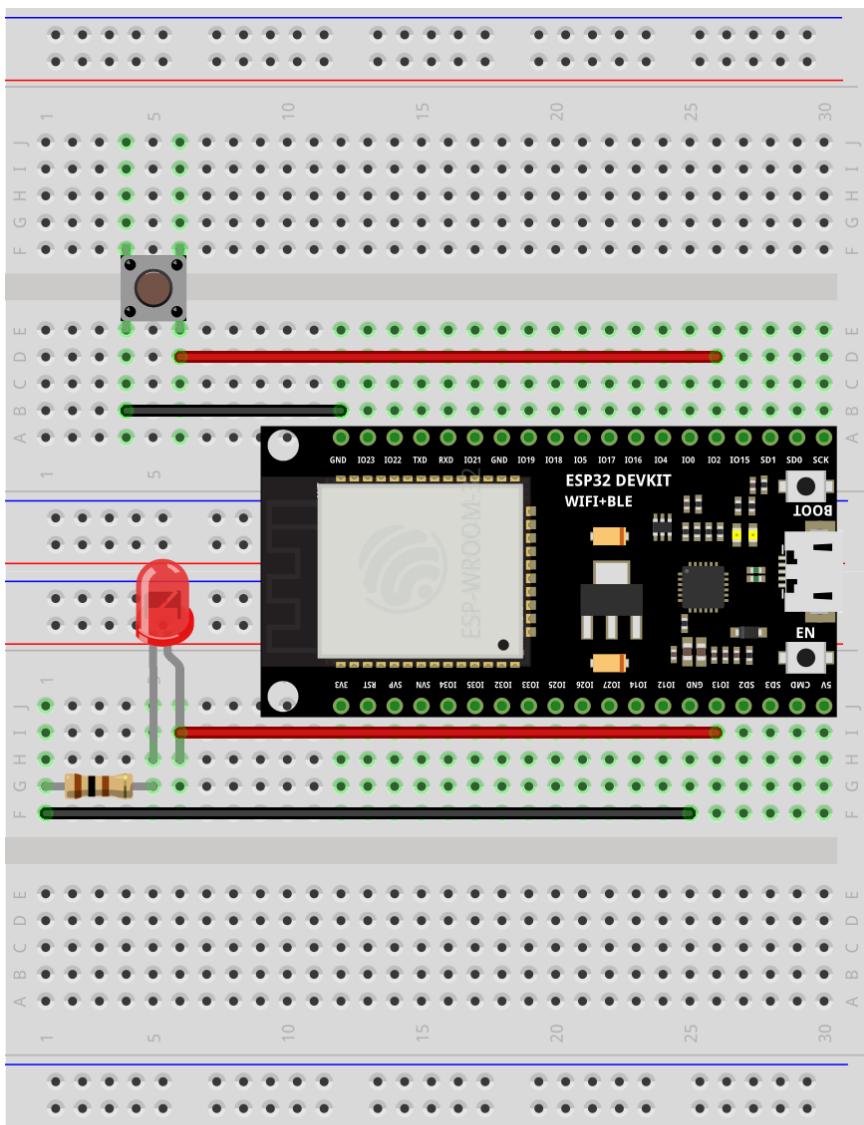


図 3.13 LED 点滅図

タクトスイッチで L チカ

せっかくなので、スイッチを使用して、LED を光らせましょう同様に以下の画像（図 3.14、図 3.15）を参考に電子回路を組み、プログラム（リスト 3.2）を参考にして、ESP32 に書き込んでください。



fritzing

図 3.14 タクトスイッチで L チカをする回路図

リスト 3.2: タクトスイッチで L チカをするプログラム

```

void setup()
{
    Serial.begin(115200); // シリアル通信を115200bpsで開始する
    pinMode(2, INPUT_PULLUP); // GPIO2を用いるまた、ESP32の内部で

```

```
PULL UPをする
pinMode(13, OUTPUT); // GPIO13を出力端子として用いる
}

void loop()
{
    if (digitalRead(2) == LOW) // PULL UPを用いているので電圧が低い
        &gt; // スイッチが押されていると判定する
    {
        delay(100); // チャタリング防止のため0.1s停止
        digitalWrite(13, HIGH); // GPIO13に電流を流しLEDを光らせる
        Serial.println("ON!");
    }
    if (digitalRead(2) == HIGH) // スイッチを押していない場合
    {
        delay(100); // チャタリング防止のため0.1s停止
        digitalWrite(13, LOW); // GPIO13の電流を止める
        Serial.println("OFF!");
    }
}
```

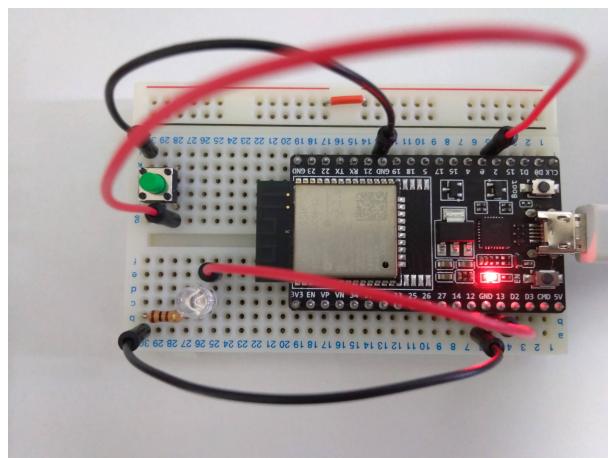


図 3.15 回路をブレッドボード上で配置した図

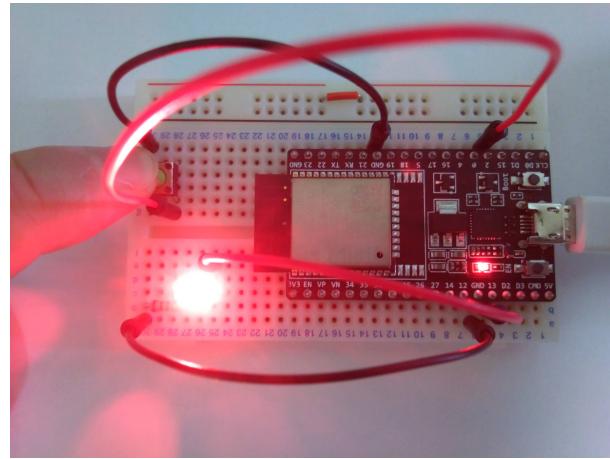


図 3.16 スイッチで LED を点滅させる図

チャタリング

スイッチを押した際、内部の金属板の接触によって電流が流れます。しかし、人間がスイッチを押すときには一回だけ押したつもりでも内部的には金属板が何回も接触し複数回の ONOFF が発生する可能性があります。そのためプログラム側での対策として、delay を何秒か挟むことで複数回の ONOFF を防ぐことができます（リスト 3.3）。

リスト 3.3: チャタリング防止のプログラム

```
if (digitalRead(2) == LOW) // PULL UPを用いているので電圧が低いと、スイッチが押されていると判定する
{
    delay(100); // チャタリング防止のため0.1s停止
    Serial.println("ON!");
}
```

3.3 応用問題: 状態遷移

二つの LED とスイッチを使用して、二つの LED の状態を以下のように変更してください

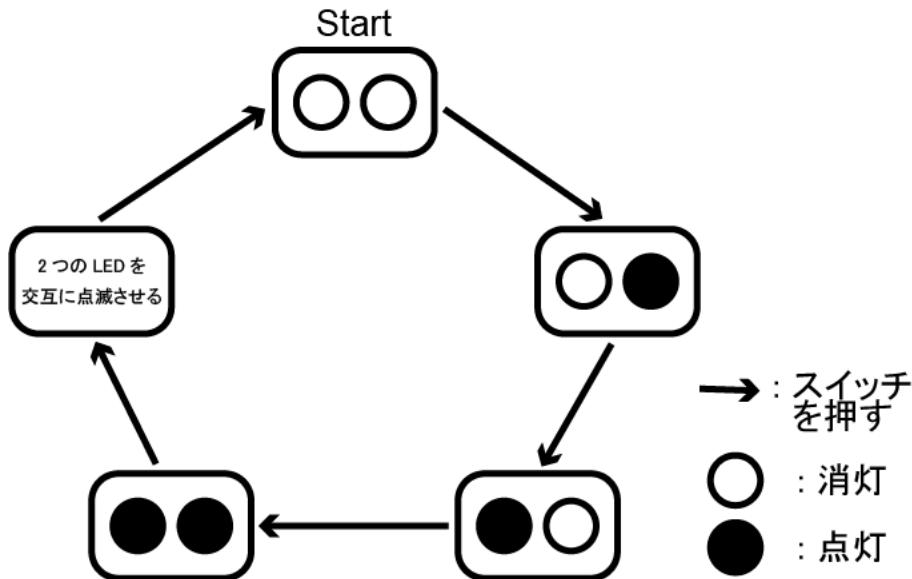
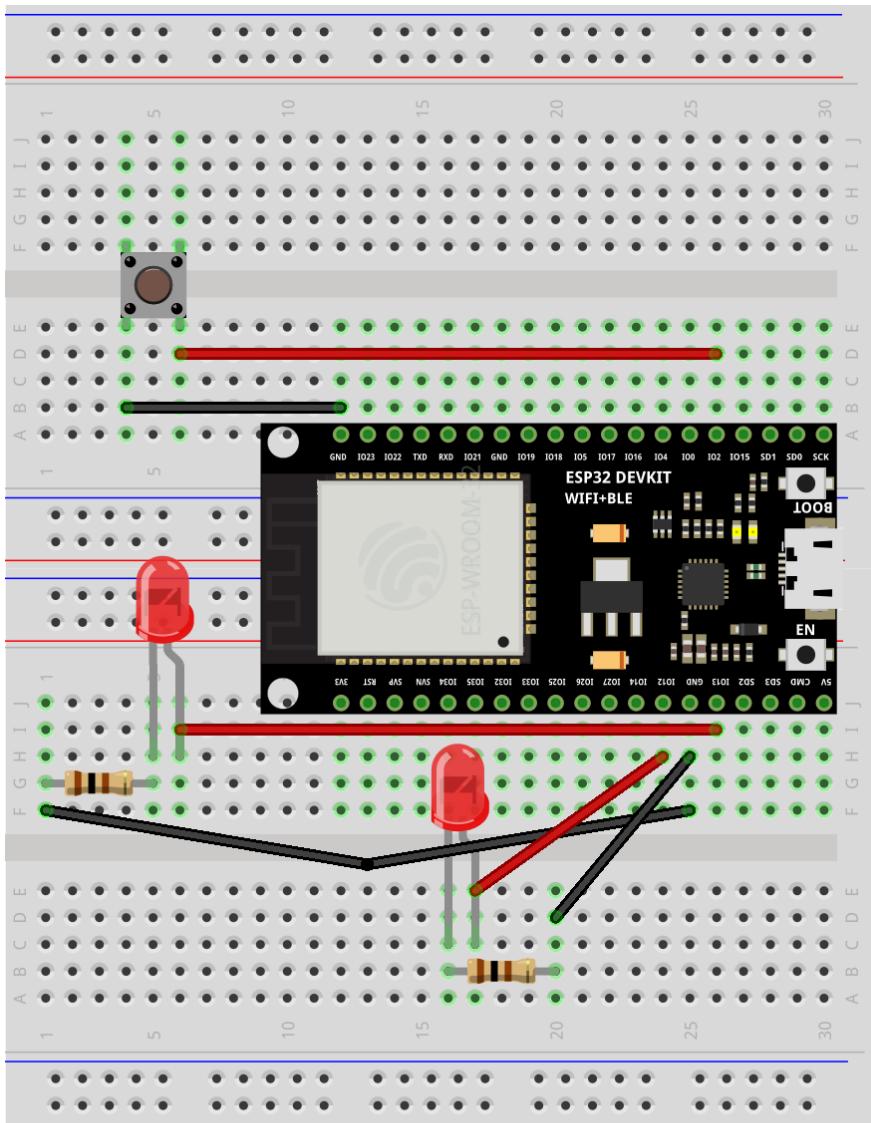


図 3.17 状態遷移図

2019年度組み込み制作講座より引用

應用問題解答

回路図 & 配置図



fritzing

図 3.18 應用問題回路図

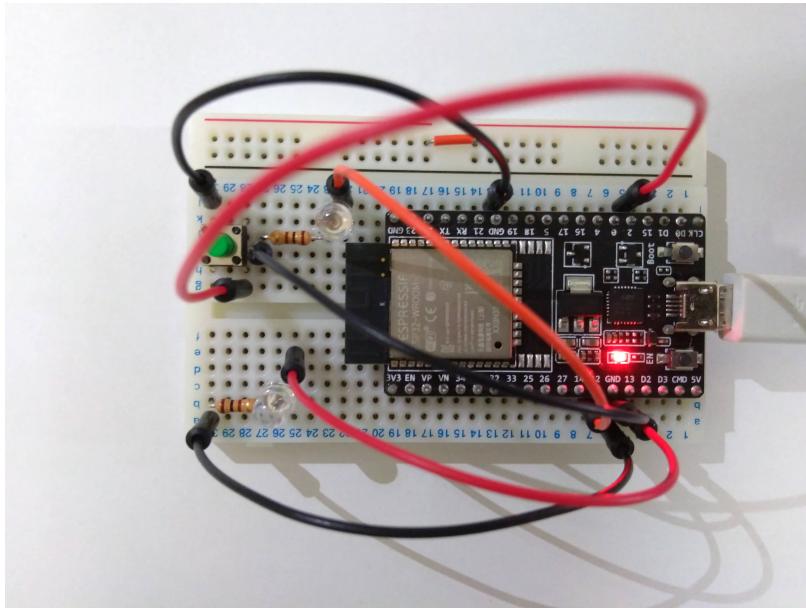


図 3.19 應用問題回路配置図

プログラム

リスト 3.4: 状態遷移 L チカプログラム

```
int state = 0;
bool is_tica = false;

void setup() {
    Serial.begin(115200);
    pinMode(13, OUTPUT);
    pinMode(12, OUTPUT);
    pinMode(2, INPUT_PULLUP);
}

void loop() {
    if (digitalRead(2) == LOW)
    {
        delay(100);
        Serial.println("ON!");
        state = state + 1;
    }
}
```

```
Serial.println(state);
if (state == 5) {
    state = 0;
    is_tica = false;
}
switch (state) {
    case 0:
        digitalWrite(12, LOW);
        digitalWrite(13, LOW);
        break;
    case 1:
        digitalWrite(12, HIGH);
        digitalWrite(13, LOW);
        break;
    case 2:
        digitalWrite(12, LOW);
        digitalWrite(13, HIGH);
        break;
    case 3:
        digitalWrite(12, HIGH);
        digitalWrite(13, HIGH);
        break;
    case 4:
        is_tica = true;
        break;
    default:
        break;
}
delay(200);
}

if (is_tica) {
    digitalWrite(13, HIGH);
    digitalWrite(12, LOW);
    delay(100);
```

```
    digitalWrite(13, LOW);
    digitalWrite(12, HIGH);
    delay(100);
}
}
```

第4章 センサのデータを Web 上に公開しよう

この章では IoT の定番であるセンサを使ってデータを取得します。目標として、温湿度センサで得たデータを Web 上に公開します。

4.1 センサを使おう

センサとは温度や湿度、匂いなどの様々な情報を信号化して機械が使いやすいようにしてくれるモノです。この章では、身近な温湿度を手軽に計測できる温湿度センサを使用します。

温湿度センサ

温湿度センサはその名の通り温度と湿度を計測してくれます。使用するセンサは DHT11 (図 4.1) というもので、取得した温湿度データをデジタル出力してくれます。

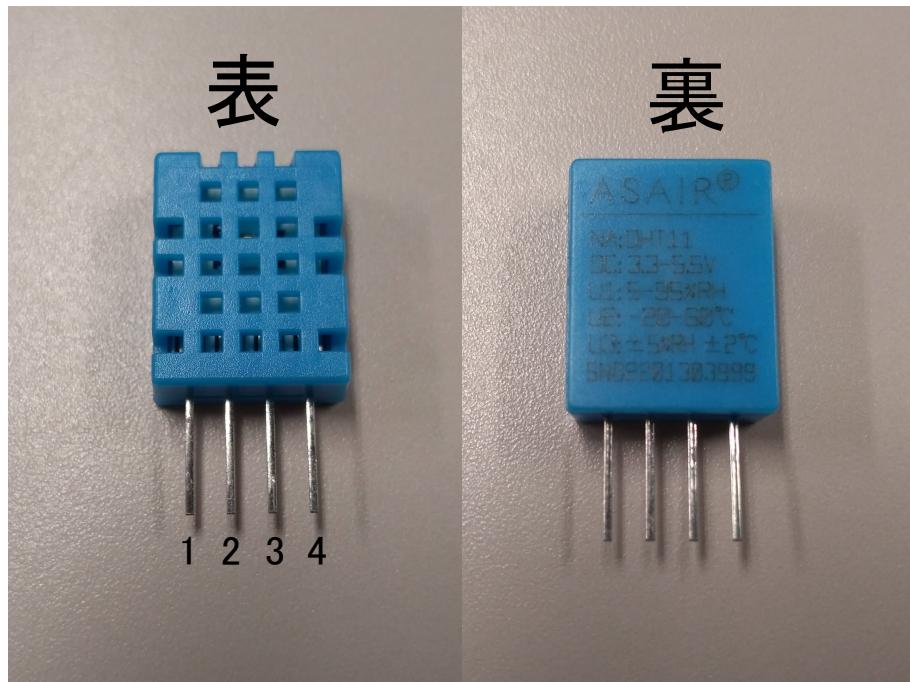


図 4.1 DHT11

DHT11 の主な仕様は以下の通りです（表 4.1）。

表 4.1 DHT11 の主な仕様

温度範囲	-20 ~ -
湿度範囲	5 ~ 95 %
サンプリング間隔	2 秒に一回

4 本あるピン（図 4.1）はそれぞれ表 4.2 のような用途で使われます。

表 4.2 DHT11 のピンについて

ピンの番号	ピンの用途
1	Vdd: 3.3 ~ 5.5V の直流を流す
2	データ出力用ピン
3	なにも接続しない
4	GND

DHT11 用ライブラリのインストール

DHT11 を ESP32 上で使うために DHT11 ライブラリを Arduino IDE にインストールします。

図 4.2 のように（スケッチ > ライブラリのインクルード > ライブラリを管理）を選択してください。

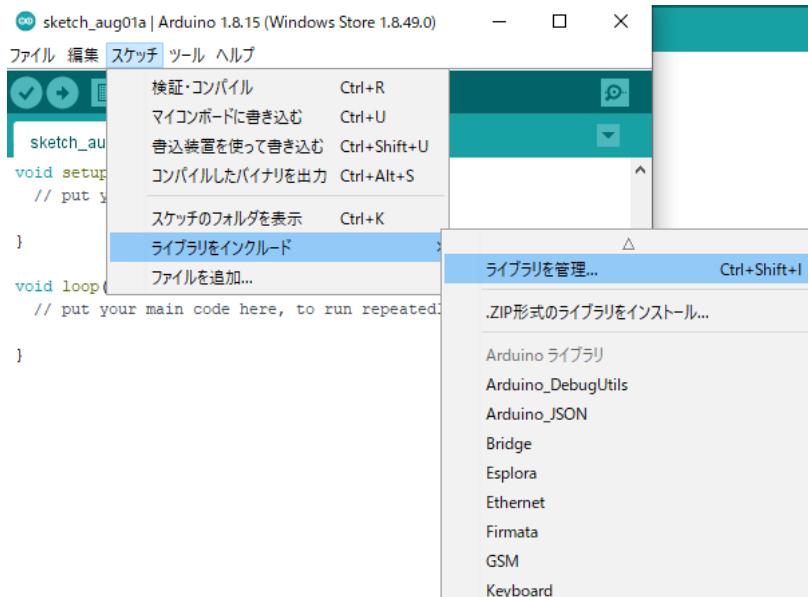


図 4.2 ライブライの管理の選択

選択するとライブライマネージャーが開かれるので、検索窓に「DHT11」を入力してください（図 4.3）。その後、DHT sensor library をインストールしてください。

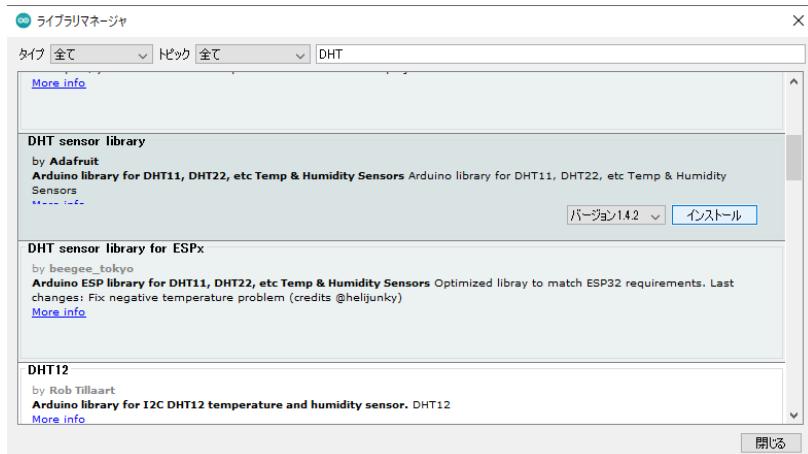


図 4.3 DHT11 用ライブライのインストール

インストールを選択すると依存ライブライの追加インストールについて聞かれるので Install all を選択してください（図 4.4）。

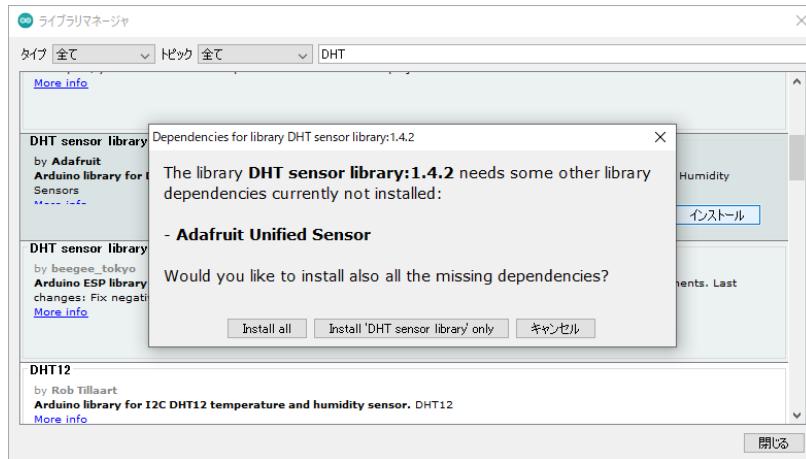
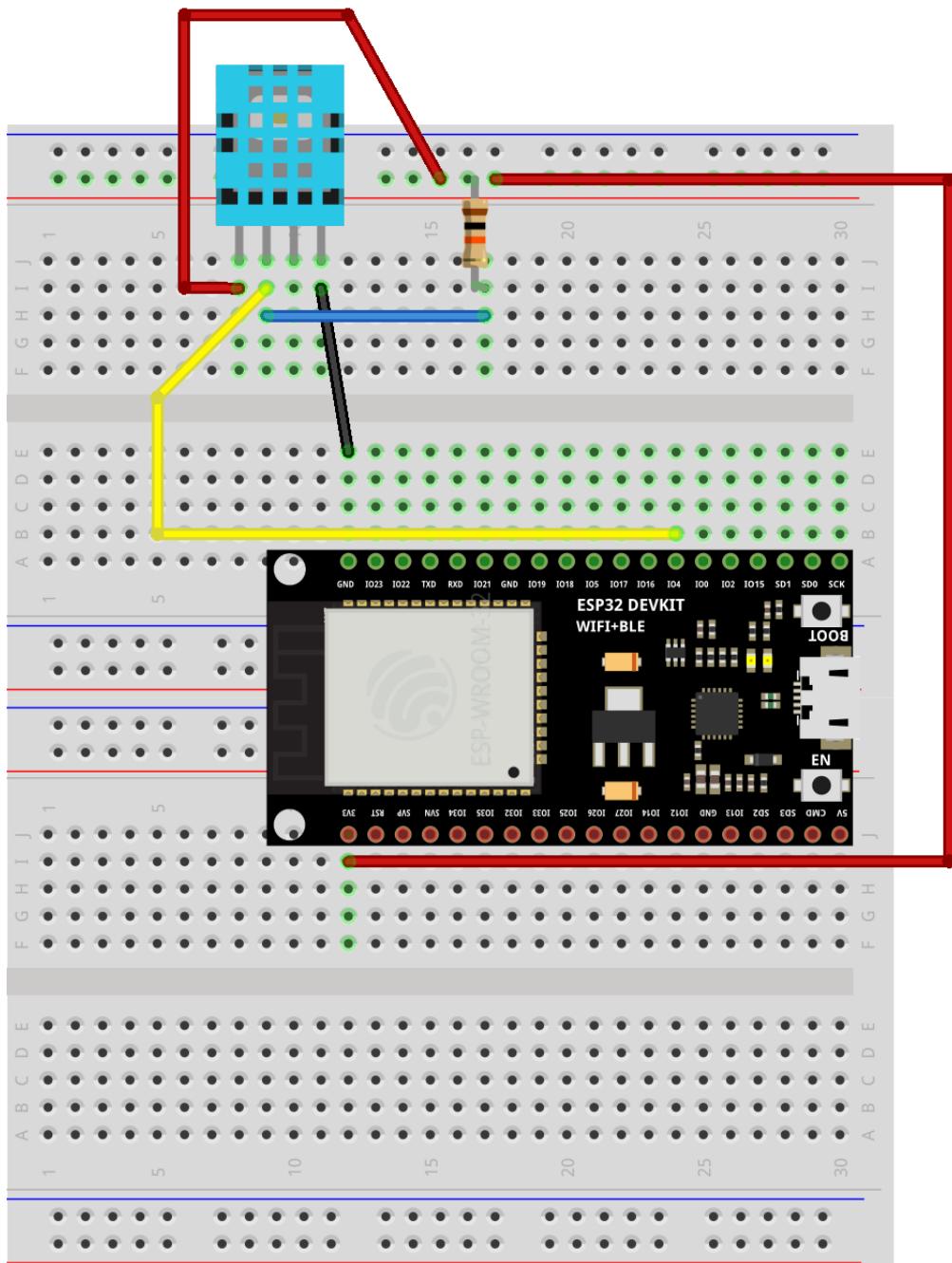


図4.4 依存ライブラリのインストール

DHT11を使って温湿度を測る

ここで実際にDHT11を使ってみましょう。図4.5と図4.6また図4.7を参考に回路を組んでください。抵抗は10kΩを使用しています。



fritzing

図 4.5 DHT11 回路図

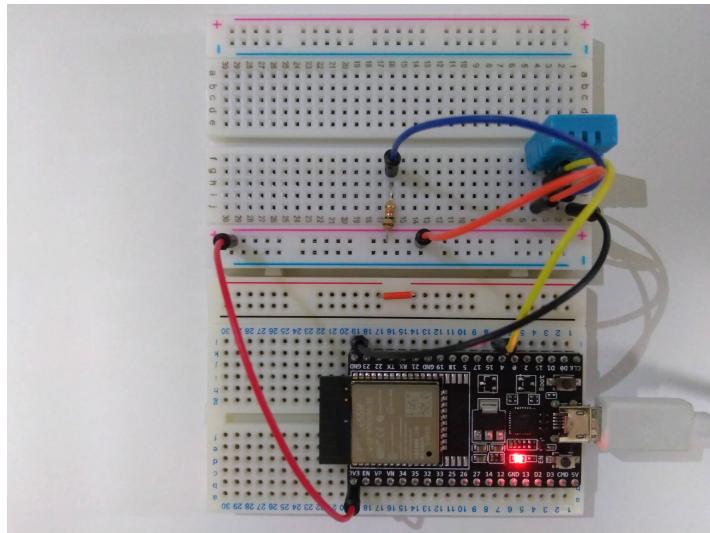


図 4.6 DHT11 回路配置図

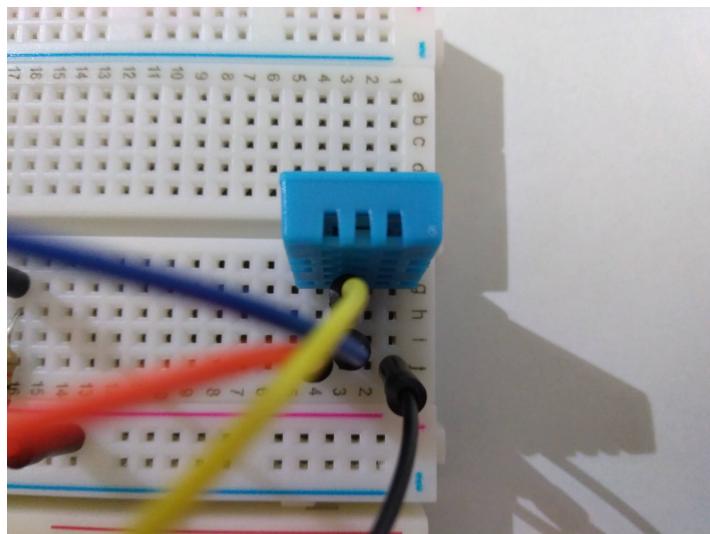


図 4.7 DHT11 アップ図

リスト 4.1: DHT11 実行プログラム

```
#include "DHT.h"  
  
#define DHTPIN 4 // センサのデータを読み取るGPIOの番号を指定する  
  
// DHTライブラリはDHT22/DHT11に対応しているので  
// 使用するセンサを指定する
```

```
#define DHTTYPE DHT11

DHT dht11(DHTPIN, DHTTYPE); // DHT11のインスタンスを作成する

void setup() {
    Serial.begin(115200);
    dht11.begin(); // DHT11を始動させる
}

void loop() {
    // DHT11のサンプリング間隔が2秒なので
    // センサが値を読むまで2秒待機
    delay(2000);

    float humidity = dht11.readHumidity(); // 湿度取得
    float temperature = dht11.readTemperature(); // 温度取得（デフォルトでは摂氏= ）

    // NaN ( Not a Number ) つまり数字を読み取れなかった場合再取得する
    // returnした場合loop()の最初に戻る
    if (isnan(humidity) || isnan(temperature)) {
        Serial.println("値が読み取れませんでした");
        return;
    }

    // 体感温度（湿度を含めた体感の温度指数）を計算する
    float apparent_temperature = dht11.computeHeatIndex(temperature, humidity);

    Serial.printf("温度: %.3lf\n", temperature);
    Serial.printf("湿度: %.3lf %\n", humidity);
    Serial.printf("体感温度: %.3lf\n", apparent_temperature);
}
```

プログラムの書き込みと、回路の配置に成功するとシリアルモニタにデータが送ら

れてきます。「値が読み取れませんでした」が表示されている部分は試しにセンサを抜いたためです。

リスト 4.2: シリアルモニタ

```
温度: 24.00 湿度: 59.00% 体感温度: 18.87
温度: 23.80 湿度: 58.00% 体感温度: 18.61
温度: 23.80 湿度: 59.00% 体感温度: 18.65
温度: 23.80 湿度: 61.00% 体感温度: 18.75
値が読み取れませんでした
値が読み取れませんでした
値が読み取れませんでした
温度: 24.50 湿度: 83.00% 体感温度: 20.55
温度: 24.60 湿度: 75.00% 体感温度: 20.28
温度: 24.70 湿度: 71.00% 体感温度: 20.21
温度: 24.80 湿度: 67.00% 体感温度: 20.13
温度: 24.80 湿度: 64.00% 体感温度: 19.99
温度: 24.80 湿度: 62.00% 体感温度: 19.89
温度: 24.80 湿度: 61.00% 体感温度: 19.85
温度: 24.90 湿度: 59.00% 体感温度: 19.86
温度: 24.80 湿度: 58.00% 体感温度: 19.71
```

4.2 Web に公開しよう

外出時に自分の部屋の温湿度を知りたいことはありませんか？外部のサーバにデータを送信することで、外出時も自宅のデータをWebで見ることができます。

Wi-Fi と接続する

外部のサーバに接続するために、まず Wi-Fi に接続します。Wi-Fi に接続するため必要な情報は以下の二つです。プログラムを書き込む際に必要になるので準備をしておいてください。

- SSID (Service Set Identifier)
 - SSID とは Wi-Fi、無線 LAN の通信規格 (IEEE802.11) で定められているアクセスポイントのを識別するための名称。芝浦で言うところの「SRAS-WPA」など。
- パスワード
 - 指定した SSID のアクセスポイントに接続する際に必要なパスワード。

Ambient

外出時に自宅のセンサのデータを Web 上で見るために、センサから取得したデータを外部のサーバに送信しますが、その外部のサーバとして Ambient を使用します。

Ambient は IoT データの可視化サービスです。データをグラフとして表示してくれるだけでなく、データを利用した様々なカスタマイズができます。

以下のリンクにアクセスして Ambient のトップページに移動してください(図 4.8)。

<https://ambidata.io/>

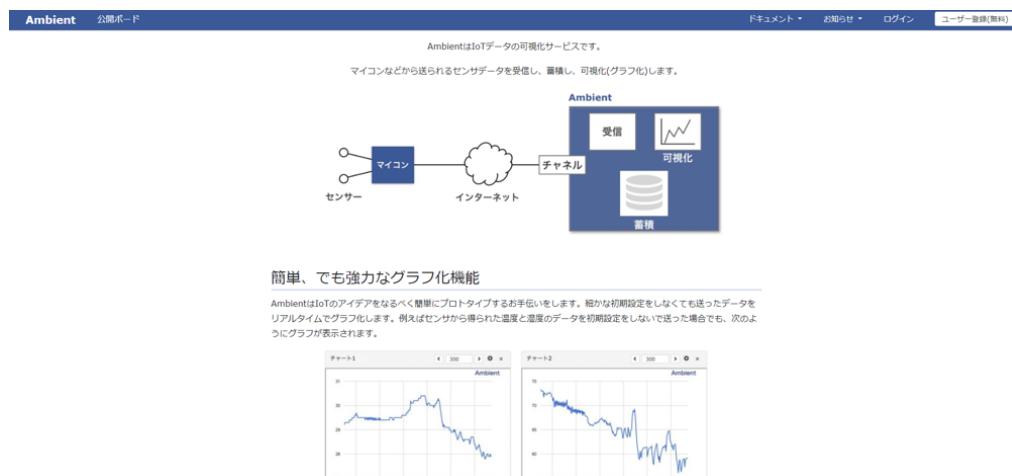


図 4.8 Ambient のトップページ

Ambient を利用するためには、まずユーザ登録をします。ユーザ登録(無料)を選択してユーザ登録画面に移動してください(図 4.9)。その後、メールアドレスとパスワードを入力してユーザ登録をしてください。



図4.9 ユーザ登録

ユーザ登録をすると登録したメールアドレスに登録完了メールが届きます（図4.10）。このメールに添付してあるリンクにアクセスすることユーザ登録完了です。



図4.10 登録完了メール

ユーザ登録完了後、ログイン画面にアクセスしログインしてください（図4.11）。



図 4.11 ログイン画面

ログイン後、チャネルを作るを選択し、チャネルを作成することで Ambient の設定は完了です。



図 4.12 チャネル作成完了画面

プログラムを書き込む際に必要な情報として以下の二つがあるので、メモをしておいてください。

- チャネル ID
- ライトキー

ライブラリのインストール

Ambient を ESP32 上で使うために Ambient ライブラリを Arduino IDE にインストールします。

図 4.2 のように（スケッチ > ライブラリのインクルード > ライブラリを管理）を選択してください

ライブラリマネージャーの検索窓に「Ambient」と入力し、候補に出てくる「Ambient ESP32 ESP8266 lib」をインストールしてください。

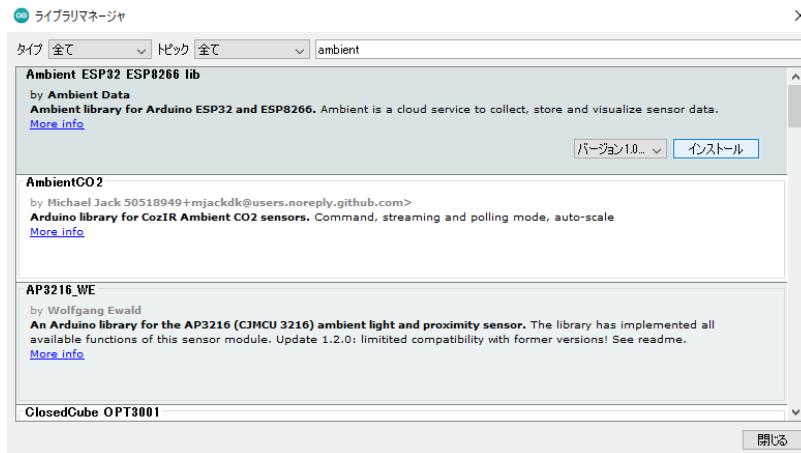


図4.13 ambient用ライブラリのインストール

Ambientにデータを送る

ここで実際にAmbientにデータを送ります。DHT11を使用するので回路図は図4.6を利用してください。プログラムはリスト4.3を書き込んでください。各々の環境に合わせて変数を書き換える必要があります。以下の変数を書き換えてください。

- SSID
 - 変数名: ssid
- パスワード
 - 変数名: password
- チャネルID
 - 変数名: channel_id
- ライトキー
 - 変数名: write_key

リスト4.3: Ambient利用プログラム

```
#include <WiFi.h>
#include "DHT.h"
#include "Ambient.h"

#define DHTPIN 4 // センサのデータを読み取るGPIOの番号を指定する

// DHTライブラリはDHT22/DHT11に対応しているので
// 使用するセンサを指定する
```

```
#define DHTTYPE DHT11

// Ambient用変数
unsigned int channel_id = 111111;
const char *write_key = "b7471121723ae295";

// WiFi接続用変数
const char *ssid = "elecom-b3506f-g";
const char *password = "*****";

DHT dht11(DHTPIN, DHTTYPE); // DHT11のインスタンスを作成する
Ambient ambient; // Ambientのインスタンスを作成する
WiFiClient wifi_client; // Ambientに接続するためのクライアントを用意

void setup() {
    Serial.begin(115200);
    WiFi.begin(ssid, password); // Wi-Fi接続開始

    while (WiFi.status() != WL_CONNECTED) // Wi-Fiアクセスポイントへ接続するまで待機
    {
        Serial.println("Waiting for Wi-Fi connection....");
        delay(500);
    }
    Serial.println("Connected to Wi-Fi");
    dht11.begin(); // DHT11を始動させる
    ambient.begin(channel_id, write_key, &wifi_client);
}

void loop() {
    // DHT11のサンプリング間隔は2秒ですが
    // Amibentのデータ送信間隔は最低でも5秒間隔を開ける
    // 必要があるので30秒待機
```

```
delay(30000);

float humidity = dht11.readHumidity(); // 湿度取得
float temperature = dht11.readTemperature(); // 温度取得（デフォルトでは摂氏= ）

// NaN ( Not a Number ) つまり数字を読み取れなかった場合再取得する
// returnした場合loop()の最初に戻る
if (isnan(humidity) || isnan(temperature)) {
    Serial.println("値が読み取れませんでした");
    return;
}

// 体感温度（湿度を含めた体感の温度指数）を計算する
float apparent_temperature = dht11.computeHeatIndex(temperature, humidity);

Serial.printf("温度: %.3lf\n", temperature);
Serial.printf("湿度: %.3lf %\n", humidity);
Serial.printf("体感温度: %.3lf\n", apparent_temperature);

ambient.set(1, temperature); // チャート1に温度データ登録
ambient.set(2, humidity); // チャート2に湿度データ登録
ambient.set(3, apparent_temperature); // チャート3に体感温度データ登録

ambient.send(); // 登録データ送信
Serial.println("Ambientにデータを送信しました");
}
```

プログラムの実行に成功するとシリアルモニタに以下のように表示されます（リスト4.4）。Wi-Fiのコネクションが完了した後、30秒ごとにDHT11より取得したデータをAmbientに送信します。

リスト 4.4: シリアルモニタ画面

```
Waiting for Wi-Fi connection....  
Connected to Wi-Fi  
温度: 24.70 湿度: 63.00% 体感温度: 19.83  
Ambientにデータを送信しました  
温度: 24.70 湿度: 61.00% 体感温度: 19.74  
Ambientにデータを送信しました  
温度: 24.70 湿度: 61.00% 体感温度: 19.74  
Ambientにデータを送信しました  
温度: 24.60 湿度: 61.00% 体感温度: 19.63  
Ambientにデータを送信しました  
温度: 24.50 湿度: 61.00% 体感温度: 19.52  
Ambientにデータを送信しました  
温度: 24.40 湿度: 61.00% 体感温度: 19.41  
Ambientにデータを送信しました  
温度: 24.40 湿度: 61.00% 体感温度: 19.41  
Ambientにデータを送信しました
```

Ambientとの通信に成功していると図 4.14 のように表示されます。ただし図 4.14 はプログラムを開始してから数分経過後のグラフです。



図 4.14 Ambient に表示されるグラフ

第5章 WebAPI を使おう

この章では WebAPI を利用して天気情報をディスプレイに表示することを目的としています。

WebAPI とは？

API とは Application Programming Interface の略でコンテキストによって様々な意味合いがありますが、主にアプリケーションが何らかの情報を得たり、渡したりする際に用いる窓口を指す際に用いられています。そのため WebAPI は Web を通してやり取りを行う API を意味しています。ゲームなどで「Twitter に共有」というリンクが設置されていることがあります、これはゲームのアプリケーションが TwitterAPI を通してゲームの内容を Twitter に共有できる機能です。

5.1 Weather API を使う

先ほど WebAPI の説明を行いますが、なかでも今回は天気を知れる API を使います。天気を知れる API は複数ありますが、ここでは「Weather API」というものを利用します。以下のリンクにアクセスして Weather API のトップページに移動してください（図 5.1）。

Weather API: <https://www.weatherapi.com/>

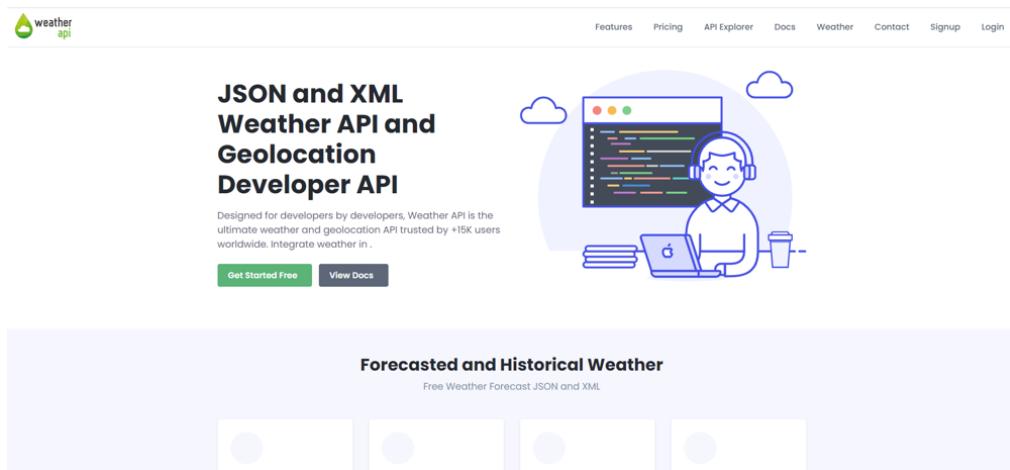


図 5.1 WeatherAPI のトップページ

Weather API を利用するためにはまず、ユーザ登録をします。Signup を選択してユーザ登録画面に移動してください（図 5.2）。登録をするために、メールアドレスとパスワードを入力し Sign up を選択してください。

図 5.2 登録画面

ユーザ登録が完了すると登録メールアドレスに認証メールが届くので（図 5.3）リンク先にアクセスをしてユーザ登録を完了してください。

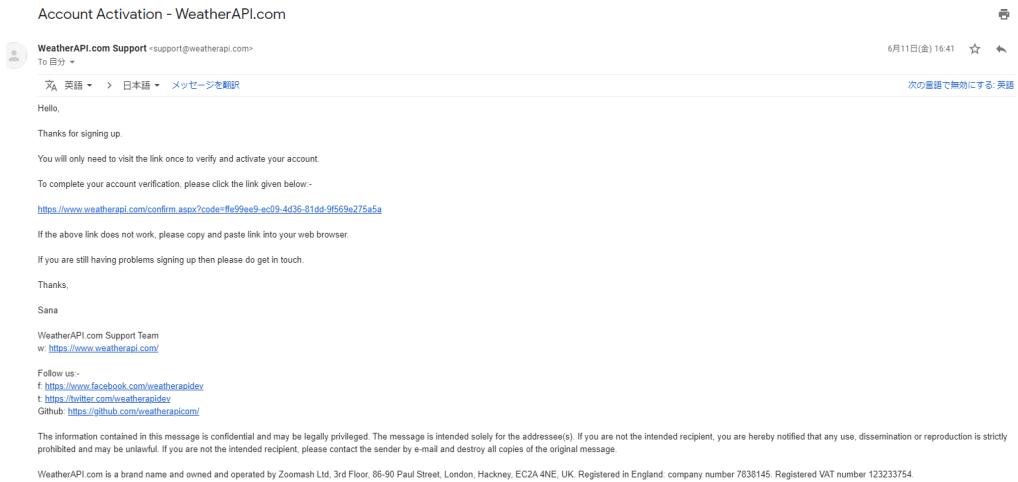


図 5.3 認証メール

その後、登録情報をもとにログインをしてください（図 5.4）。

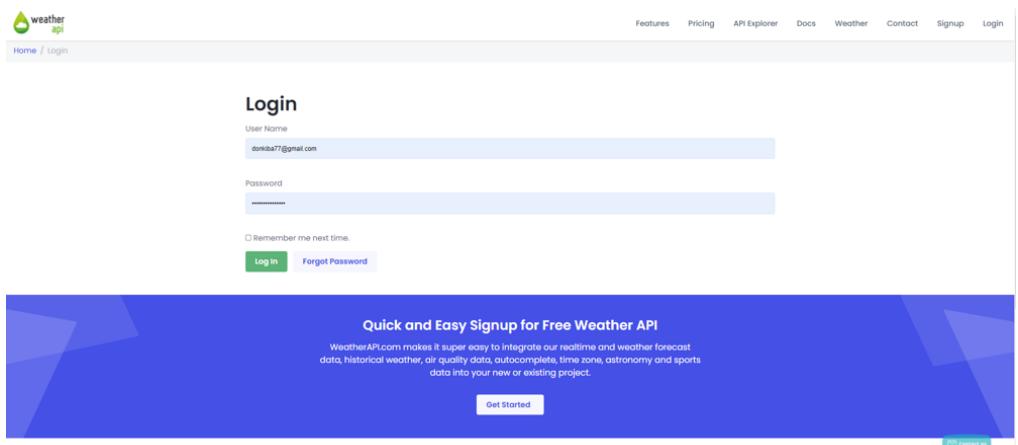


図 5.4 ログイン画面

ログイン後はマイページに遷移します（図 5.5）。この際ページ上部の

- API key

は Weather API を使用する際の認証に使うのでメモをしておいてください。次に Weather API の仕様を確認するために API Explorer を選択してください。

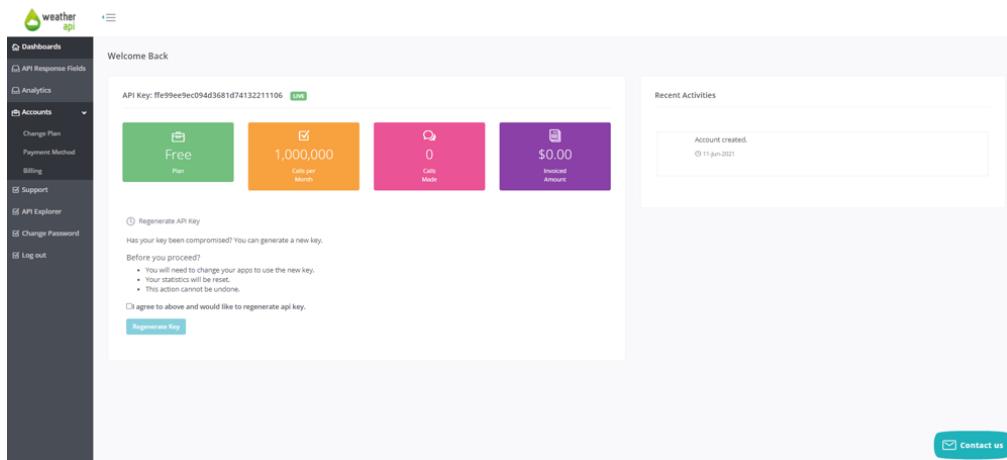


図 5.5 マイページ

図 5.6

Parameter	Value	Type	Location	Description
q	Saitama	string	query	Pass US Zipcode, UK Postcode, Canada Postcode, IP address, Latitude/Longitude (decimal degree) or city name. Visit request parameter section to learn more.
aqi	no	string	query	Get air quality data

図 5.6 API の試行ページ

Call `https://api.weatherapi.com/v1/current.json?key=*****&q=Saitama&aqi=no`

リスト 5.1: ResponsesCode

200

リスト 5.2: ResponsesHeader

```
{  
    "Transfer-Encoding": "chunked",  
    "Connection": "keep-alive",  
    "Vary": "Accept-Encoding",  
    "CDN-PullZone": "93447",  
    "CDN-Uid": "8fa3a04a-75d9-4707-8056-b7b33c8ac7fe",  
    "CDN-RequestCountryCode": "FI",  
    "CDN-EdgeStorageId": "615",  
    "CDN-CachedAt": "2021-07-12 14:05:36",  
    "CDN-RequestPullSuccess": "True",  
    "CDN-RequestPullCode": "200",  
    "CDN-RequestId": "a45be49d32c7a76559a3f3920d337f53",  
    "CDN-Cache": "MISS",  
    "Cache-Control": "public, max-age=180",  
    "Content-Type": "application/json",  
    "Date": "Mon, 12 Jul 2021 12:05:36 GMT",  
    "Server": "BunnyCDN-FI1-615"  
}
```

リスト 5.3: ResponseBody

```
{  
    "location": {  
        "name": "Saitama",  
        "region": "Saitama",  
        "country": "Japan",  
        "lat": 35.91,  
        "lon": 139.66,  
        "tz_id": "Asia/Tokyo",  
        "localtime_epoch": 1626091536,  
        "localtime": "2021-07-12 21:05"  
    },  
    "current": {  
        "temperature": 25.5,  
        "humidity": 60,  
        "wind": 10,  
        "pressure": 1013,  
        "clouds": 30,  
        "rain": 0,  
        "forecast": [{"date": "2021-07-13", "temp": 26.5, "precip": 0},  
                    {"date": "2021-07-14", "temp": 27.0, "precip": 0},  
                    {"date": "2021-07-15", "temp": 28.0, "precip": 0},  
                    {"date": "2021-07-16", "temp": 29.0, "precip": 0},  
                    {"date": "2021-07-17", "temp": 30.0, "precip": 0}],  
        "last_update": "2021-07-12T21:05:36Z"  
    }  
}
```

```
    "last_updated_epoch": 1626087600,  
    "last_updated": "2021-07-12 20:00",  
    "temp_c": 29.4,  
    "temp_f": 84.9,  
    "is_day": 0,  
    "condition": {  
        "text": "Partly cloudy",  
        "icon": "//cdn.weatherapi.com/weather/64x64/night/116.png",  
        "code": 1003  
    },  
    "wind_mph": 7.6,  
    "wind_kph": 12.2,  
    "wind_degree": 162,  
    "wind_dir": "SSE",  
    "pressure_mb": 1010.0,  
    "pressure_in": 30.3,  
    "precip_mm": 0.0,  
    "precip_in": 0.0,  
    "humidity": 61,  
    "cloud": 47,  
    "feelslike_c": 32.1,  
    "feelslike_f": 89.8,  
    "vis_km": 10.0,  
    "vis_miles": 6.0,  
    "uv": 7.0,  
    "gust_mph": 9.2,  
    "gust_kph": 14.8  
}  
}
```

この形式を JSON (JavaScript Object Node) と言います。

HTTPとは

http://den3.net/activity_diary/2021/02/01/2718/

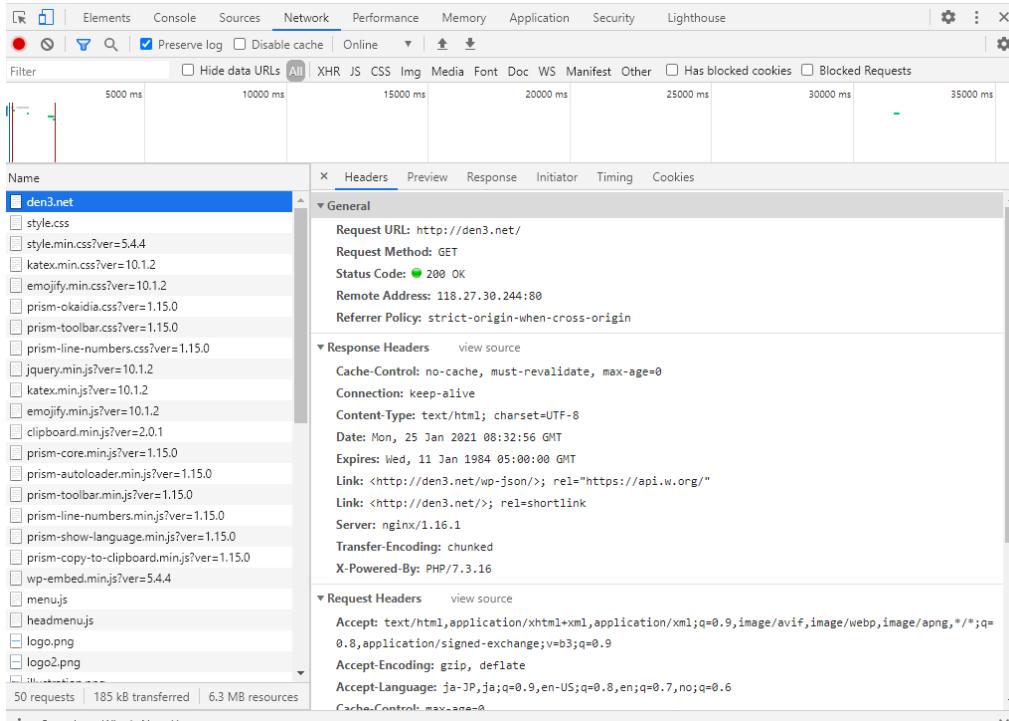


図 5.7 2021-01-25-173558

電算のホームページにアクセスした際に行われている通信内容。

TCP/IP をベースにしたアプリケーション層のプロトコルです。HTTP はリクエスト/レスポンス型のプロトコルであり、クライアントはリクエストを出した場合レスポンスが返ってくるまで待機します。あとステートレスなのが特徴です。

HTTP メッセージ

リクエストメッセージとレスポンスマッセージのことはまとめて HTTP メッセージと呼ばれます。

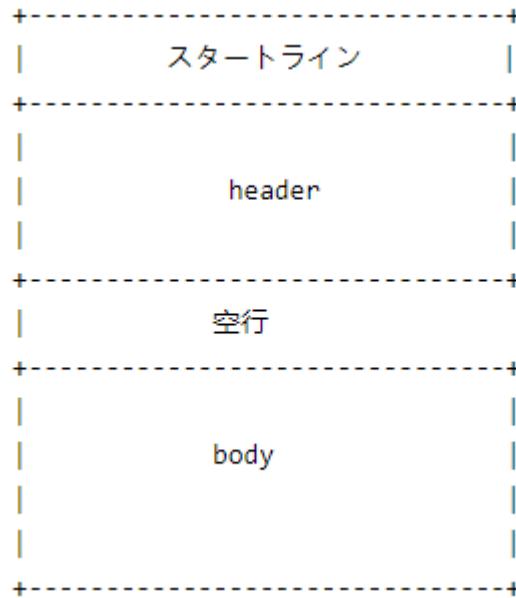


図 5.8 2021-01-31-235422

スタートライン

ここではリクエストメッセージとレスポンスマッセージで書かれている内容が異なり総称としてスタートラインと呼ばれています。リクエストメッセージではリクエストラインを用います。内容としては、メソッド(後述)、リクエスト URI、プロトコルバージョン(HTTP/1.1)が書かれており、レスポンスマッセージではステータスラインを用いステータスコード(後述)などが書かれています。

ヘッダ

メッセージのメタデータについて書いています(データについての付加情報)

ボディ

メッセージが入ります よくあるのがJson化したデータやHTMLなどがここに入っています。

HTTP メソッド

前述したようにHTTPにはメソッドと呼ばれているHTTPリクエストの種類を表すものがあります。本当は8つのメソッドがあるので今回はCURD(Create, Update, Read, Delete)と呼ばれる性質を満たす代表的なメソッド

- GET
- POST
- PUT
- DELETE

の四つを紹介したいと思います。

GET

リソースの取得

ブログの記事を取得した例

```
▼ General
Request URL: http://den3.net/activity_diary/2021/01/31/2752/
Request Method: GET
Status Code: 200 OK
Remote Address: 118.27.30.244:80
Referrer Policy: strict-origin-when-cross-origin
```

図 5.9 2021-02-01-004533

POST

リソースの追加、作成ブログなどを投稿するときにはこのメソッドが呼ばれます。

コメントを投稿した際の例



図 5.10 2021-02-01-004715

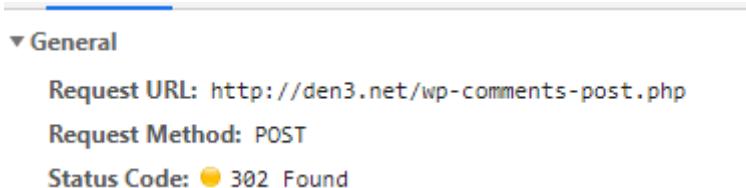


図 5.11 2021-02-01-004705



図 5.12 2021-02-01-004631

- PUT
 - リソースの作成、更新
 - ブログを更新したいときに使います。
- DELETE
 - リソースの削除
 - 投稿などを削除した時に使われます。

ステータスコード

前述したとおり HTTP はリクエスト/レスポンス型のプロトコルなのでリクエストを送るとレスポンスが返ってきます代表的なのは下の画像に書いてある Status Code に書いてある 200 OK とかです

▼ General

Request URL: <http://den3.net/>

Request Method: GET

Status Code: 200 OK

Remote Address: 118.27.30.244:80

Referrer Policy: strict-origin-when-cross-origin

▼ Response Headers view parsed

```
HTTP/1.1 200 OK
Server: nginx/1.16.1
Date: Sun, 31 Jan 2021 14:45:28 GMT
Content-Type: text/html; charset=UTF-8
Transfer-Encoding: chunked
Connection: keep-alive
X-Powered-By: PHP/7.3.16
Expires: Wed, 11 Jan 1984 05:00:00 GMT
Cache-Control: no-cache, must-revalidate, max-age=0
Link: <http://den3.net/wp-json/>; rel="https://api.w.org/"
Link: <http://den3.net/>; rel=shortlink
```

図 5.13 2021-01-31-234745

意味としては

- 2xx
 - リクエスト成功
 - ex: 200 OK
- 3xx
 - リダイレクトを行うときに返ってくる
- 4xx
 - クライアントエラー
 - クライアントが送った処理が間違っている
 - ex: 404 not found
- 5xx
 - サーバエラー
 - サーバ内でエラーが発生している
 - ex: 500 Internal Server Error

などがあります

参照

山本 陽平. Webを支える技術 HTTP, URI, HTML, そして REST WEB+DB
PRESS plus 株式会社技術評論社.

ESP32でJSONを利用する

これらの形式が、WeatherAPIから帰ってくるため、ESP32側で使えるようにしなければなりませんそこで、公開されているライブラリである arduinoJSON を利用します。

JSONドキュメントを作る時にキャパシティを計算する必要がある。ArduinoJson Assistant <https://arduinojson.org/v6/assistant/>

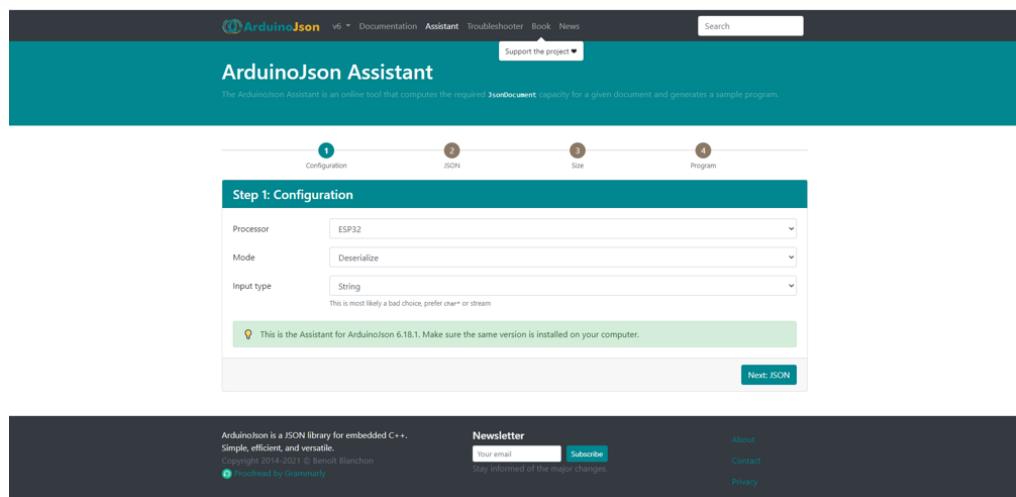


図 5.14 ArudinoAssistant のトップページ

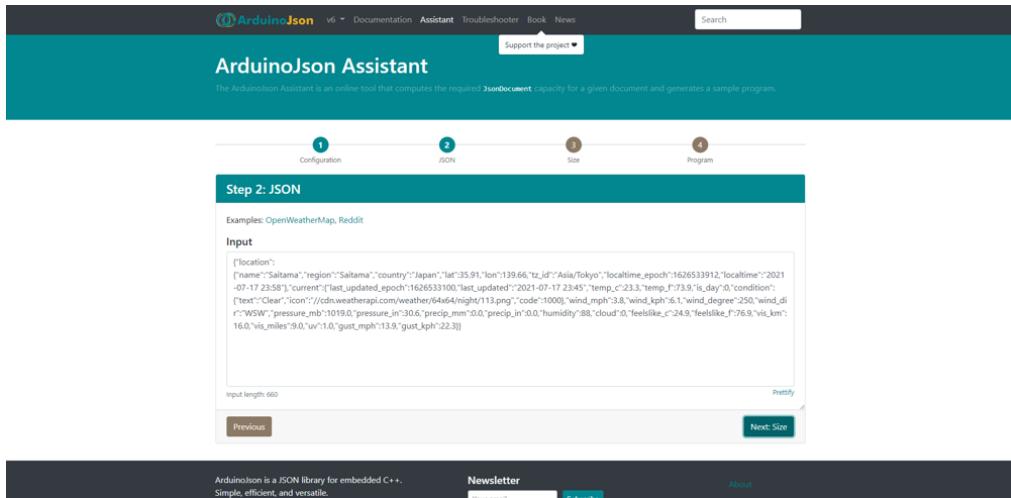


図 5.15 JSON の大きさ設定

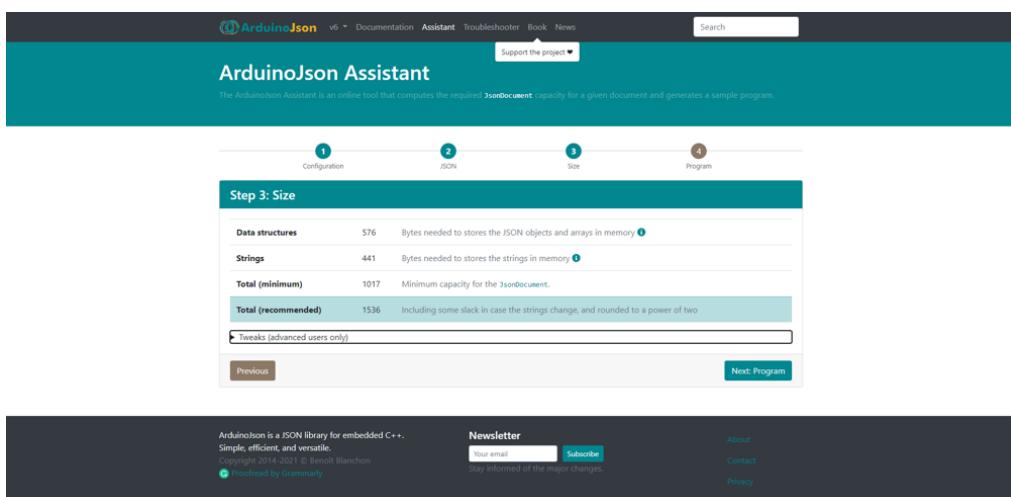


図 5.16 JSON のサイズ確認画面

リスト 5.4: 最初のプログラム

```
// String input;

StaticJsonDocument<1536> doc;

DeserializationError error = deserializeJson(doc, input);
```

```
if (error) {
    Serial.print(F("deserializeJson() failed: "));
    Serial.println(error.f_str());
    return;
}

JsonObject location = doc["location"];
const char* location_name = location["name"]; // "Saitama"
const char* location_region = location["region"]; // "Saitama"
const char* location_country = location["country"]; // "Japan"
float location_lat = location["lat"]; // 35.91
float location_lon = location["lon"]; // 139.66
const char* location_tz_id = location["tz_id"]; // "Asia/Tokyo"
long location_localtime_epoch = location["localtime_epoch"]; // 1626533912
const char* location_localtime = location["localtime"]; // "2021-07-17 23:58"

JsonObject current = doc["current"];
long current_last_updated_epoch = current["last_updated_epoch"]; // 1626533100
const char* current_last_updated = current["last_updated"]; // "2021-07-17 23:45"
float current_temp_c = current["temp_c"]; // 23.3
float current_temp_f = current["temp_f"]; // 73.9
int current_is_day = current["is_day"]; // 0

JsonObject current_condition = current["condition"];
const char* current_condition_text = current_condition["text"]; // "Clear"
const char* current_condition_icon = current_condition["icon"];
int current_condition_code = current_condition["code"]; // 1000

float current_wind_mph = current["wind_mph"]; // 3.8
float current_wind_kph = current["wind_kph"]; // 6.1
int current_wind_degree = current["wind_degree"]; // 250
const char* current_wind_dir = current["wind_dir"]; // "WSW"
int current_pressure_mb = current["pressure_mb"]; // 1019
float current_pressure_in = current["pressure_in"]; // 30.6
```

```
int current_precip_mm = current["precip_mm"]; // 0
int current_precip_in = current["precip_in"]; // 0
int current_humidity = current["humidity"]; // 88
int current_cloud = current["cloud"]; // 0
float current_feelslike_c = current["feelslike_c"]; // 24.9
float current_feelslike_f = current["feelslike_f"]; // 76.9
int current_vis_km = current["vis_km"]; // 16
int current_vis_miles = current["vis_miles"]; // 9
int current_uv = current["uv"]; // 1
float current_gust_mph = current["gust_mph"]; // 13.9
float current_gust_kph = current["gust_kph"]; // 22.3
```

JSON のライブラリをインストールする

JSON を ESP32 上で使うためにライブラリを Arduino IDE にインストールします。

図 5.17 のように（スケッチ > ライブラリのインクルード > ライブラリを管理）を選択してください。

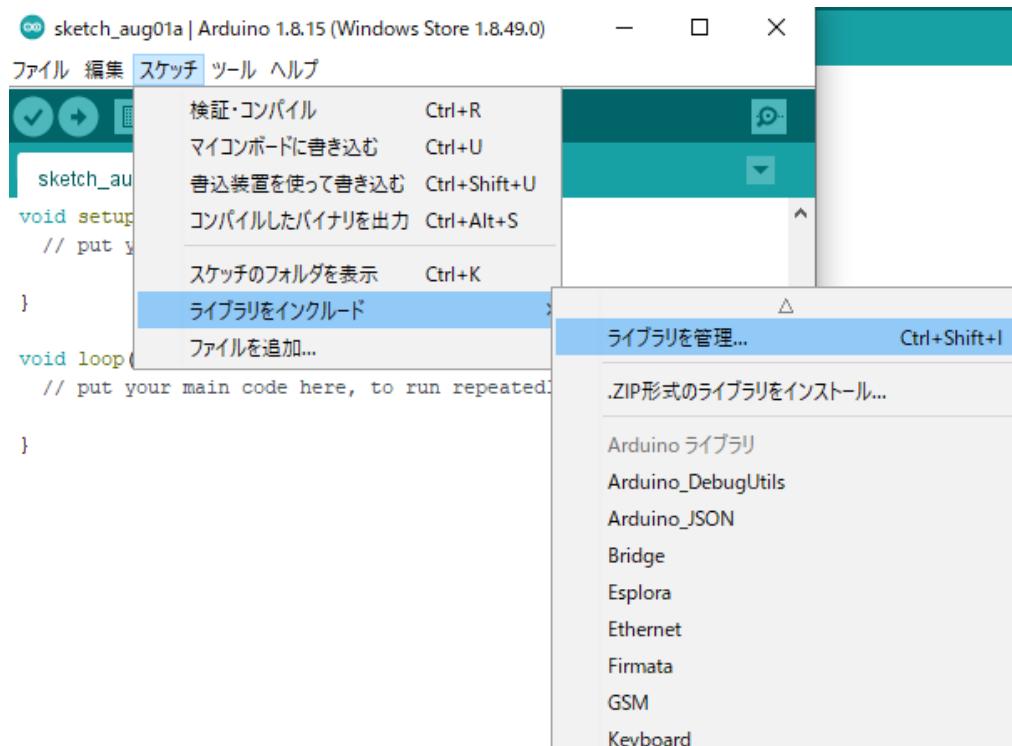


図 5.17 ライブラリの管理の選択

選択するとライブラリマネージャーが開かれるので、検索窓に「ArduinoJSON」を入力してください(図 5.18)。その後、「ArduinoJson」をインストールしてください。

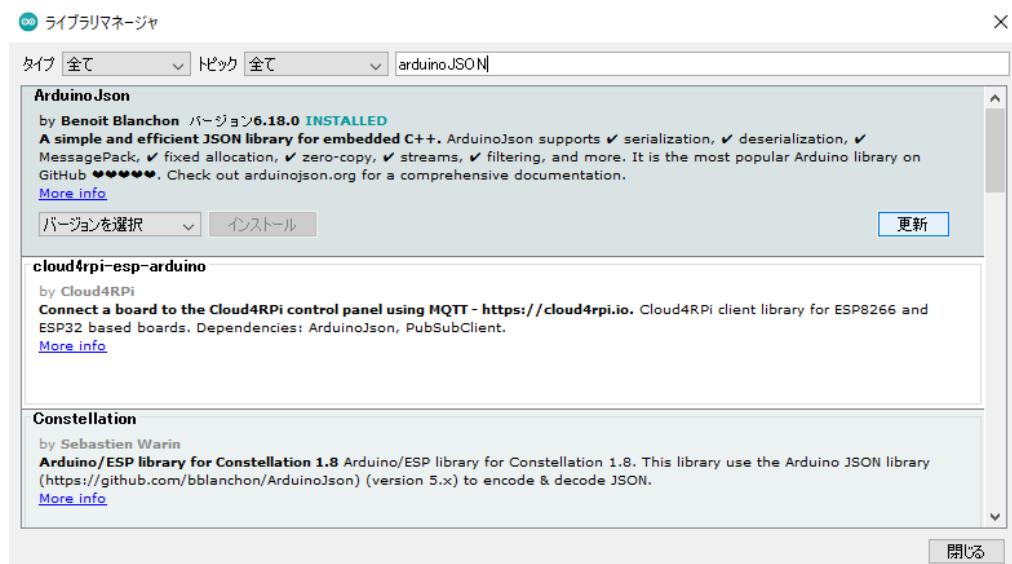


図 5.18 ArduinoJson 用ライブラリのインストール

Weather API からデータを取得する

ここで、実際に WeatherAPI からデータを取得してみます。リスト 5.5 のプログラムを ESP32 に書き込んでください。各々の環境に合わせて変数を書き換える必要があります。以下の変数を書き換えてください。

- SSID
 - 変数名: ssid
- パスワード
 - 変数名: password
- API Key
 - Weather API に用いる API Key
 - 変数名: api_key
- 地名
 - Weather API で取得したい地名
 - 変数名: location

リスト 5.5: Weather API との通信

```
#include <WiFi.h>
#include <HTTPClient.h>
#include <ArduinoJson.h>

// WiFi接続用変数
const char *ssid = "elecom-b2809f-g";
const char *password = "fapd4rpfac3u";

// WeatherAPI用変数
const String api_key = "ffe99ee9ec094d3681d74132211106";
const String location = "Saitama";

struct Weather {
    const char *region;
    float temperature;
    int humidity;
};
```

```
void setup()
{
    Serial.begin(115200);
    WiFi.begin(ssid, password); // Wi-Fi接続開始

    while (WiFi.status() != WL_CONNECTED) // Wi-Fiアクセスポイントへ
接続するまで待機
    {
        Serial.println("Waiting for Wi-Fi connection....");
        delay(500);
    }
    Serial.println("Connected to Wi-Fi");
}

void loop()
{
    HTTPClient http;
    String target_url = "https://api.weatherapi.com/v1/current.json?key=";
    target_url += (api_key + "&q=" + location + "&aqi=no");
    http.begin(target_url); // HTTP通信を開始する

    int http_code = http.GET(); // HTTP通信でGETする

    Serial.printf("status code : %d\n", http_code);
    if (http_code > 0) // HTTP通信が失敗すると負値になる
    {
        if (http_code == HTTP_CODE_OK) // HTTPコードが200の場合成功
        {
            String payload = http.getString(); // HTTPのレスポンスボディ
            を取得
            Serial.println(payload);
            Weather weather = parse(payload); // WeatherAPIのJSONをパースする
        }
    }
}
```

```
Serial.println("-----weather-----");
Serial.println(weather.region);
Serial.println(weather.temperature);
Serial.println(weather.humidity);
}

else if (http_code > 500) {
    Serial.printf("Server Error: %d", http_code);
}
else if (http_code > 400) {
    Serial.printf("Client Error: %d", http_code);
}
else
{
    Serial.println(http.errorToString(http_code).c_str());
}
http.end(); // HTTP通信の終了
delay(60000);
}

Weather parse(String input)
{
    Serial.println("parse.....");
    StaticJsonDocument<1536> doc; // JSONをパースするための領域を作成
    DeserializationError error = deserializeJson(doc, input); // JSON
    をパースする

    if (error) // パースに失敗すると呼ばれる
    {
        Serial.print(F("deserializeJson() failed: "));
        // F()マクロは、指定した文字列分がSRAMからFlashメモリに移動する。
        Serial.println(error.f_str());
        Weather weather = {"", 0, 0};
        return weather;
    }
}
```

```
}

JsonObject location = doc["location"];
const char *location_region = location["region"]; // "Saitama"

JsonObject current = doc["current"];
float current_temp = current["temp_c"]; // 23.3
int current_humidity = current["humidity"]; // 88%

Weather weather = {location_region, current_temp, current_humidity};

return weather;
}
```

一分ごとに Weather API にアクセスし情報を取得しています。取得した情報をパースした後にリスト 5.6 のように表示しています。

リスト 5.6: Weather API との通信をシリアルモニタに表示

```
Waiting for Wi-Fi connection.....

Connected to Wi-Fi
status code : 200
{"location": {"name": "Saitama", "region": "Saitama", "country": "Japan", "lat": 35.91, "lon": 139.76}
parse.....
-----weather-----
Saitama
30.00
59
2021-08-11 17:00
status code : 200
{"location": {"name": "Saitama", "region": "Saitama", "country": "Japan", "lat": 35.91, "lon": 139.76}
parse.....
-----weather-----
Saitama
30.00
```

```
59
```

```
2021-08-11 17:00
```

```
status code : 200
```

```
{"location":{"name":"Saitama","region":"Saitama","country":"Japan","lat":35.91,"lon":
```

```
parse.....
```

```
-----weather-----
```

```
Saitama
```

```
30.00
```

```
59
```

```
2021-08-11 18:15
```

5.2 ディスプレイを使う

ここで、取得した情報を手軽に確認するためにディスプレイを使ってみます。今回使うディスプレイは ESP32 との通信に I2C という通信方式を利用しているので、ま すそちらを紹介します。

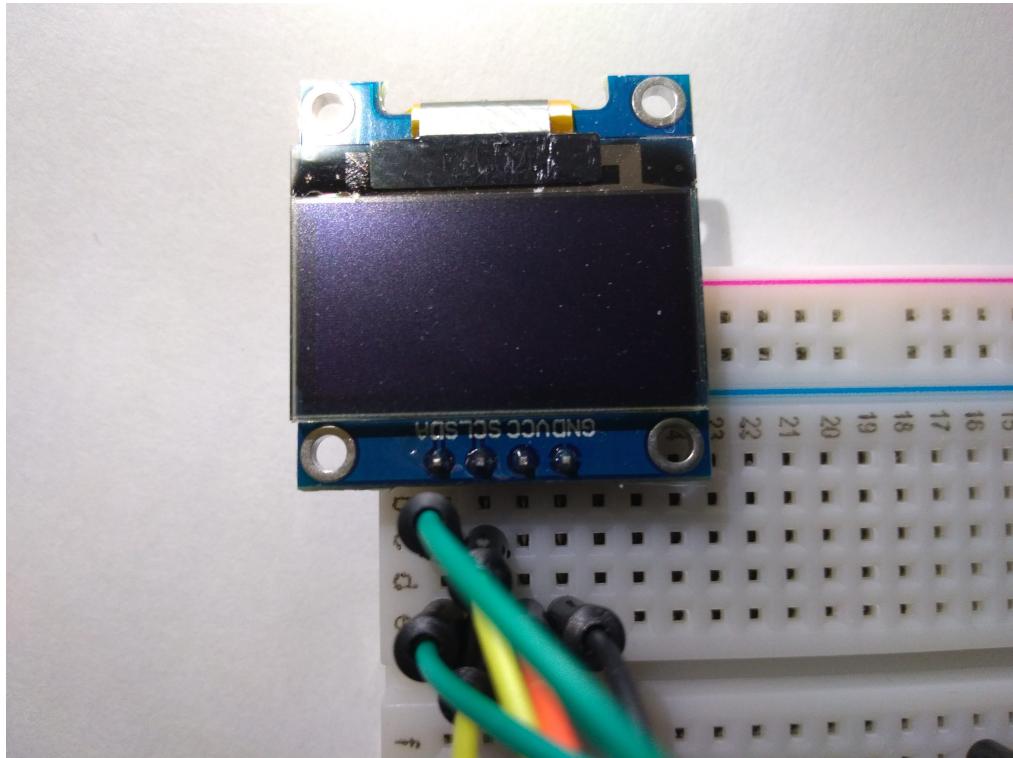


図 5.19 P_20210811_184332

I2C (Inter-Integrated Circuit) とは

I2C はフィリップ社が開発したシリアル通信方式です。I2C に必要な通信戦は 4 本で使用目的は電源 (Vdd)、GND、SDA (シリアルデータ)、SCL (シリアルクロック) です。SDA はデータの書き込みと読み込みを行い、SCL は通信先との同期をとる際に使用されます。I2C では通信するデバイスはマスタとスレーブに分類され、マスタがスレーブとの通信を管理します。ここでは ESP32 がマスタに相当し、ディスプレイがスレーブに相当します。また、マスタがスレーブを認識するためにスレーブにはそれぞれ認識アドレスが割り当てられます。

プルアップ抵抗

ライブラリのインストール

ディスプレイを ESP32 上で使うためにライブラリを Arduino IDE にインストールします。

図 5.17 のように (スケッチ > ライブラリのインクルード > ライブラリを管理) を選択してください。

選択するとライブラリマネージャーが開かれるので、検索窓に「ssd1306 esp32」を入力してください(図 5.18)。その後、「ESP8266 ans ESP32 OLED driver for SSD1306 displays」をインストールしてください

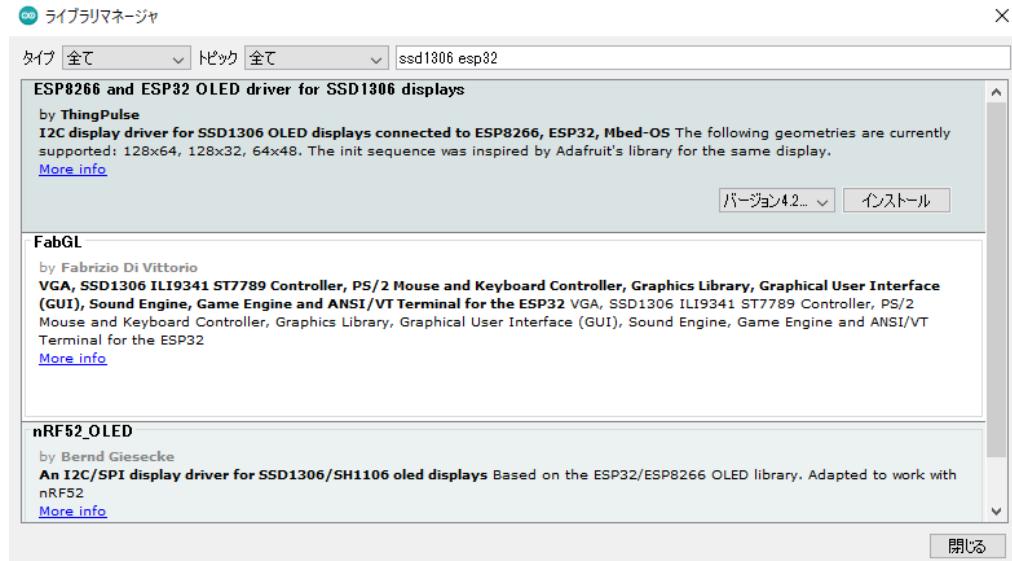


図 5.20 SSD1306 用ライブラリのインストール

ディスプレイの表示

ここで実際にディスプレイを表示させてみましょう。今回は Hello,World を表示させてみたいと思います。回路図(図 5.21)を参考に電子回路を組み、プログラム(リスト 5.7)を書き込んでください。

回路図

必要材料みたいな感じで表示出来たら良さそう

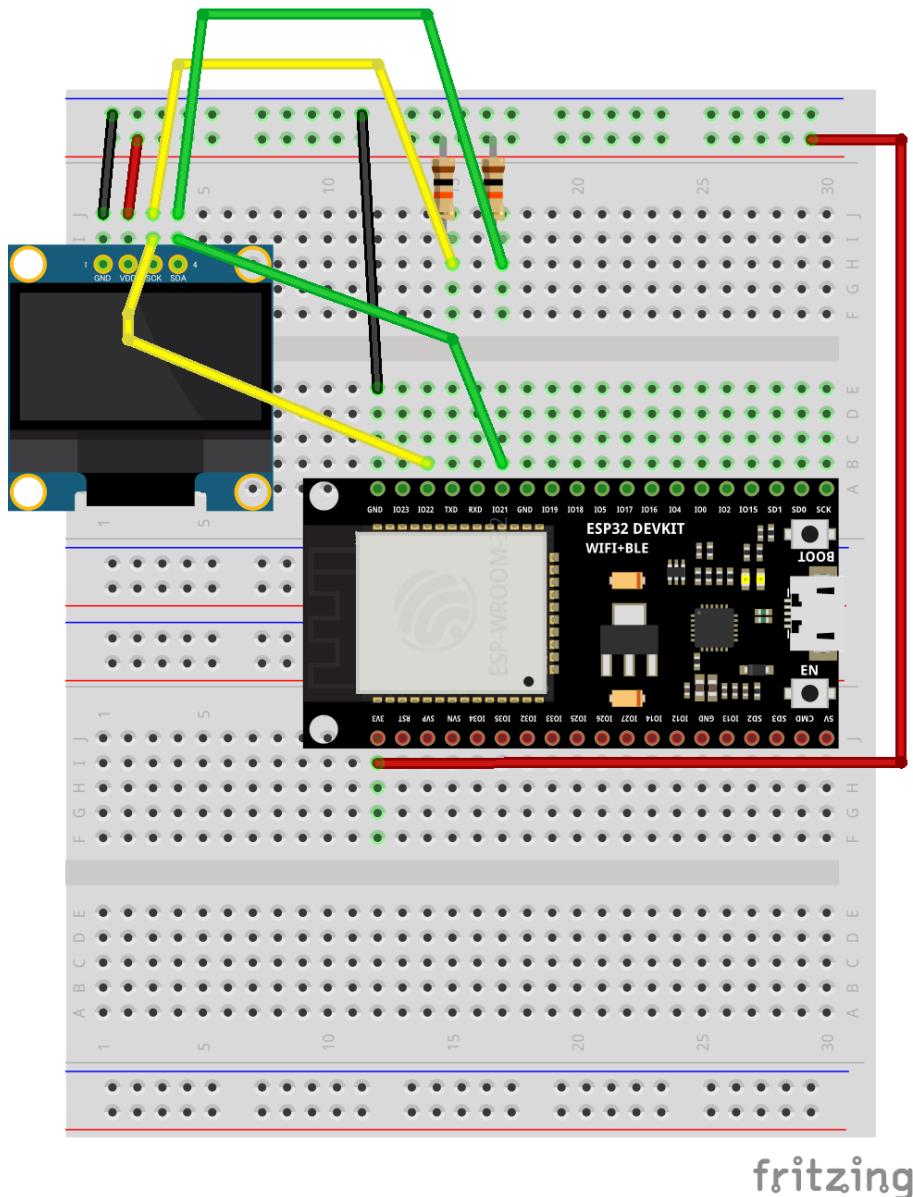


図 5.21 ディスプレイ表示回路図

リスト 5.7: ディスプレイ表示プログラム

```
#include <Wire.h> // I2Cを利用するためのライブラリ
#include "SSD1306.h"

SSD1306 display(0x3c, 21, 22); // ディスプレイのインスタンスを作成
```

する。

// アドレス、 SDA、 SCLを指定

```
void setup()
{
    display.init(); // ディスプレイの初期化
    display.setFont(ArialMT_Plain_24); // フォントサイズ24pxで表示
    display.drawString(0, 0, "Hello,World"); // 左上を原点とした座標
    // (0,0)に"Hello,World"
    // 表示
    display.display(); // 指定した文字列を表示させる
}

void loop(){}

```

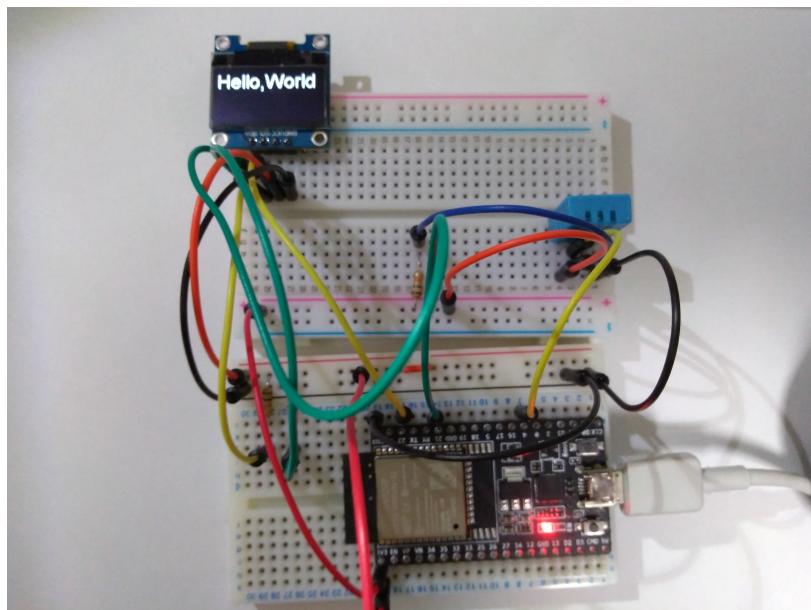


図 5.22 P_20210807_121205



図 5.23 P_20210807_121228

5.3 Weather API から得たデータをディスプレイに表示

```
#include <WiFi.h>
#include <HTTPClient.h>
#include <ArduinoJson.h>

#include <Wire.h> // I2Cを利用するためのライブラリ
#include "SSD1306.h" // ディスプレイのライブラリ

SSD1306 display(0x3c, 21, 22); // ディスプレイのインスタンスを作成する。
// アドレス、SDA、SCLを指定

// WiFi接続用変数
const char *ssid = "elecom-b2809f-g";
const char *password = "fapd4rpfac3u";
```

```
// WeatherAPI用変数
const String api_key = "ffe99ee9ec094d3681d74132211106";
const String location = "Saitama";

struct Weather {
    const char *region;
    float temperature;
    int humidity;
    const char *last_updated;
};

void setup()
{
    Serial.begin(115200);
    WiFi.begin(ssid, password); // Wi-Fi接続開始

    while (WiFi.status() != WL_CONNECTED) // Wi-Fiアクセスポイントへ
接続するまで待機
    {
        Serial.println("Waiting for Wi-Fi connection....");
        delay(500);
    }
    Serial.println("Connected to Wi-Fi");

    display.init(); // ディスプレイの初期化
}

void loop()
{
    display.clear(); // ディスプレイの文字をすべて消す

    HTTPClient http;
    String target_url = "https://api.weatherapi.com/v1/current.json?key=";
```

```
target_url += (api_key + "&q=" + location + "&aqi=no");
http.begin(target_url); // HTTP通信を開始する

int http_code = http.GET(); // HTTP通信でGETする

Serial.printf("status code : %d\n", http_code);
if (http_code > 0) // HTTP通信が失敗すると負値になる
{
    if (http_code == HTTP_CODE_OK) // HTTPコードが200の場合成功
    {
        String payload = http.getString(); // HTTPのレスポンスボディ
        を取得
        Serial.println(payload);
        Weather weather = parse(payload); // WeatherAPIのJSONをパースする
        Serial.println("-----weather-----");
        Serial.println(weather.region);
        Serial.println(weather.temperature);
        Serial.println(weather.humidity);
        Serial.println(weather.last_updated);
        // char [100]
        display.setFont(ArialMT_Plain_10); // フォントサイズを10pxに設定
        display.drawString(0, 0, "region:"); // (x座標, y座標, 表示したい文字列)
        display.drawString(0, 12, "temperature:");
        display.drawString(0, 24, "humidity:");
        display.drawString(0, 36, "last_updated:");
        display.drawString(65, 0, weather.region);
        display.drawString(65, 12, String(weather.temperature) + "°C");
        display.drawString(65, 24, String(weather.humidity) + "%");
        display.drawString(30, 48, weather.last_updated);

        display.display(); // 設定した文字列をディスプレイに表示させ
```

```
る
}

else if (http_code > 500) {
    Serial.printf("Server Error: %d", http_code);
}

else if (http_code > 400) {
    Serial.printf("Client Error: %d", http_code);
}

else
{
    Serial.println(http.errorToString(http_code).c_str());
}

http.end(); // HTTP通信の終了
delay(60000);
}

Weather parse(String input)
{
    Serial.println("parse.....");
    StaticJsonDocument<1536> doc; // JSONをパースするための領域を作成
    DeserializationError error = deserializeJson(doc, input); // JSON
    をパースする

    if (error) // パースに失敗すると呼ばれる
    {
        Serial.print(F("deserializeJson() failed: "));
        // F()マクロは、指定した文字列分がSRAMからFlashメモリに移動する。
        Serial.println(error.f_str());
        Weather weather = {"", 0, 0};
        return weather;
    }
}
```

```
JsonObject location = doc["location"];
const char *location_region = location["region"]; // "Saitama"

JsonObject current = doc["current"];
const char *current_last_updated = current["last_updated"]; // "2021-07-17 23:45"
float current_temp = current["temp_c"]; // 23.3
int current_humidity = current["humidity"]; // 88%

Weather weather =
{location_region, current_temp, current_humidity, current_last_updated};

return weather;
}
```

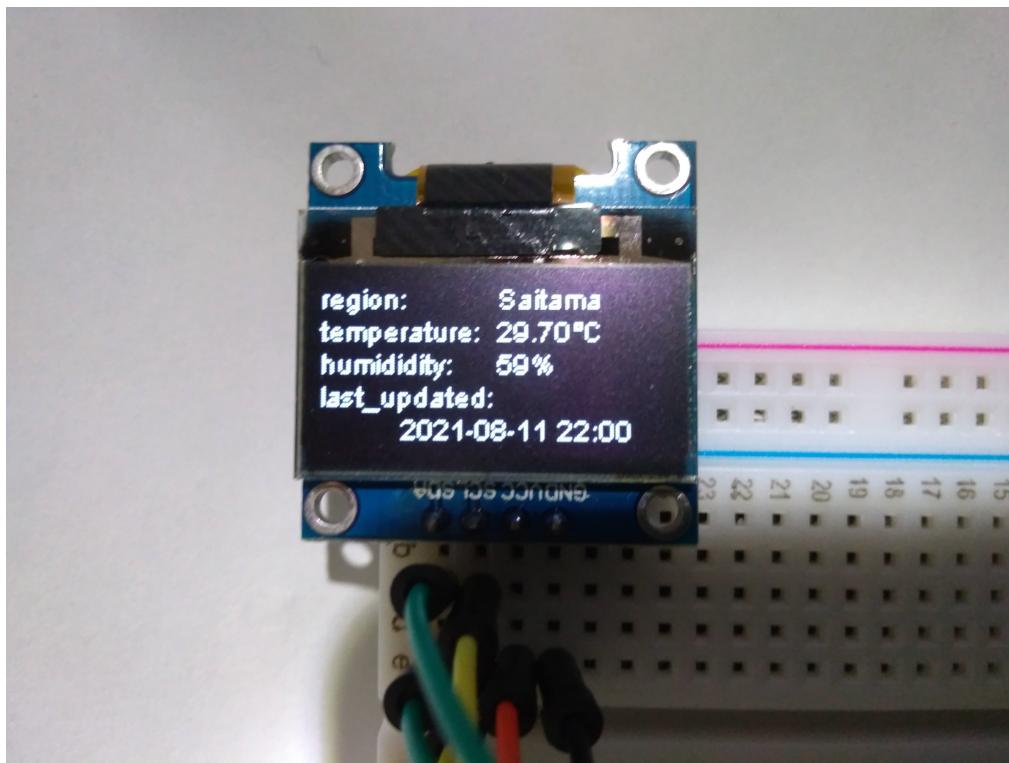


図 5.24 P_20210811_231214

Weather api は 15 分に一回更新される

5.4 DHT11 で得たデータをディスプレイに表示

リスト 5.8: DHT11 のデータをディスプレイに表示プログラム

```
#include "DHT.h"

#include <Wire.h> // I2Cを利用するためのライブラリ
#include "SSD1306.h" // ディスプレイのライブラリ

#define DHTPIN 4 // センサのデータを読み取るGPIOの番号を指定する
// DHTライブラリはDHT22/DHT11に対応しているので
// 使用するセンサを指定する
#define DHTTYPE DHT11

SSD1306 display(0x3c, 21, 22); // ディスプレイのインスタンスを作成
する。
// I2Cアドレス、SDA、SCLを指定
DHT dht11(DHTPIN, DHTTYPE); // DHT11のインスタンスを作成する

void setup()
{
    Serial.begin(115200);
    dht11.begin(); // DHT11を始動させる
    display.init(); // ディスプレイの初期化
}

void loop() {
    // DHT11のサンプリング間隔が2秒なので
    // センサが値を読むまで2秒待機
    delay(2000);
    display.clear(); // ディスプレイの文字をすべて消す

    float humidity = dht11.readHumidity(); // 湿度取得
    float temperature = dht11.readTemperature(); // 温度取得（デフォ
```

```
ルトでは摂氏=  )  
  
// NaN ( Not a Number ) つまり数字を読み取れなかった場合再取得する  
// returnした場合loop()の最初に戻る  
if (isnan(humidity) || isnan(temperature)) {  
    Serial.println("値が読み取れませんでした");  
    return;  
}  
  
// 体感温度（湿度を含めた体感の温度指数）を計算する  
float apparent_temperature = dht11.computeHeatIndex(temperature, humidity);  
  
Serial.printf("温度: %.3lf\n", temperature);  
Serial.printf("湿度: %.3lf %\n", humidity);  
Serial.printf("体感温度: %.3lf\n", apparent_temperature);  
  
display.setFont(ArialMT_Plain_10); // フォントサイズを10pxに設定  
display.drawString(0, 0, "temperature"); // (x座標, y座標, 表示  
したい文字列)  
display.drawString(0, 25, "humidity");  
display.setFont(ArialMT_Plain_24); // フォントサイズを24pxに設定  
display.drawString(50, 10, String(temperature)); // String()で文  
字列に変換  
display.drawString(50, 30, String(humidity));  
display.setFont(ArialMT_Plain_10); // フォントサイズを10pxに設定  
display.drawString(110, 22, "°C");  
display.drawString(110, 42, "%");  
  
display.display(); // 設定した文字列をディスプレイに表示させる  
}
```

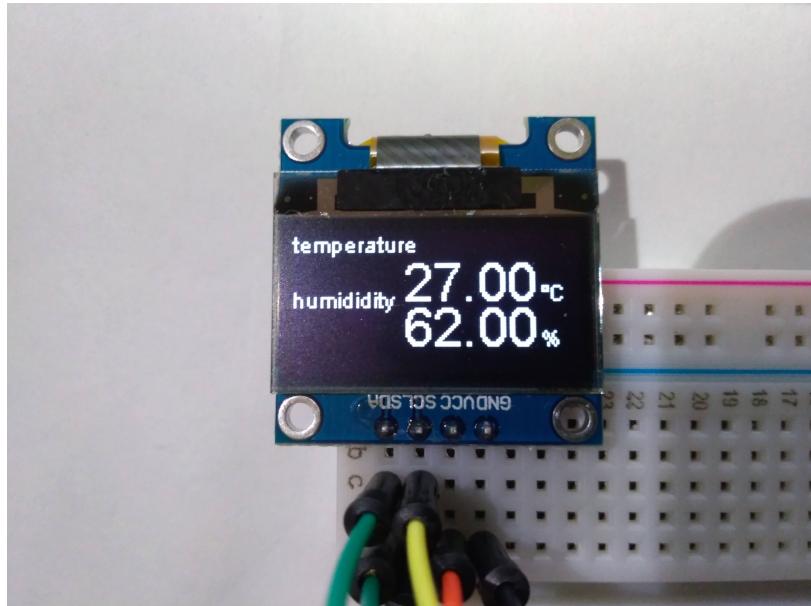


図 5.25 P_20210809_140907

5.5 応用問題: 時計を表示してみる

```
#include <WiFi.h>

#include <Wire.h> // I2Cを利用するためのライブラリ
#include "SSD1306.h" // ディスプレイのライブラリ

SSD1306 display(0x3c, 21, 22); // ディスプレイのインスタンスを作成
する。

// アドレス、SDA、SCLを指定

// WiFi接続用変数
const char *ssid = "elecom-b2809f-g";
const char *password = "fapd4rpfac3u";

int JST = 3600 * 9;
```

```
void setup() {
    Serial.begin(115200);
    WiFi.begin(ssid, password); // Wi-Fi接続開始

    while (WiFi.status() != WL_CONNECTED) // Wi-Fiアクセスポイントへ
接続するまで待機
    {
        Serial.println("Waiting for Wi-Fi connection....");
        delay(500);
    }
    Serial.println("Connected to Wi-Fi");

    configTime(JST, 0, "ntp.nict.jp", "0.jp.pool.ntp.org", "time1.google.com");
    // 標準時間, サマータイム, ntpサーバ
    display.init(); // ディスプレイの初期化
}

struct tm timeInfo;//時刻を格納するオブジェクト

void loop() {
    delay(1000);

    display.clear(); // ディスプレイの文字をすべて消す

    getLocalTime(&timeInfo);//tmオブジェクトのtimeInfoに現在時刻を入れ
込む

    char date[12], now_time[7];
    sprintf(date, "%04d/%02d/%02d",
timeInfo.tm_year + 1900, timeInfo.tm_mon + 1, timeInfo.tm_mday);
    sprintf(now_time, "%02d:%02d", timeInfo.tm_hour, timeInfo.tm_min);
    Serial.println(date);

    display.setFont(ArialMT_Plain_16); // フォントサイズを10pxに設定
```

```
display.drawString(2, 2, String(date));
display.setFont(ArialMT_Plain_24); // フォントサイズを24pxに設定
display.drawString(35, 25, String(now_time));

display.display(); // 設定した文字列をディスプレイに表示させる
}
```

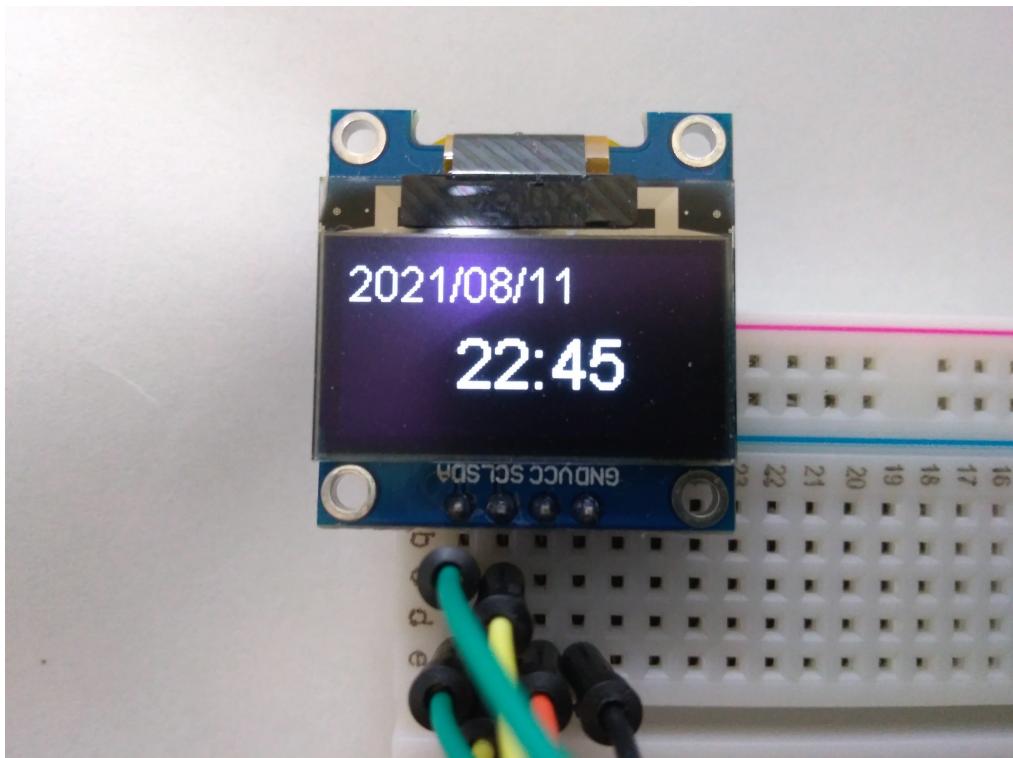


図 5.26 P_20210811_224508

第6章 應用編

6.1 Web サーバからのリクエスト

6.2 2台のESP32を使ってピンポンする

サーバクライアント Interface 2018.9 より Wi-Fi ネットワークはアクセス・ポイント (AP) を中心としたネットワークアクセスポイントは多くの場合、インターネットなどの他のネットワークに接続しており、その場合はルータとも呼ばれるアクセス・ポイントに接続する端末をステーション (STA) という。ESP32 を AP モードするには
> WiFi.softAP(ssid, password); STA モードでアクセスポイントに接続するには
> WiFi.begin(ssid, password);

WiFi のアクセスポイントがなくても ESP32 が 2つあれば、片方をアクセスポイントにして通信できる

6.3 VScode から ESP32 にスケッチを書き込む

まず、拡張機能の検索窓に「Arduino」と入力して Arduino の拡張機能をインストールしてください(図 6.1)。

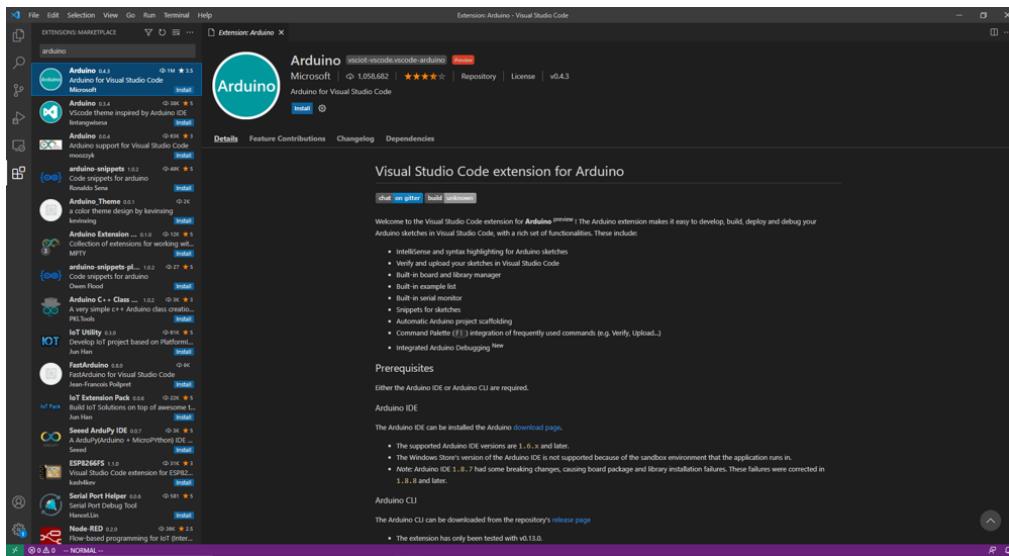


図 6.1 拡張機能で Arduino を Install

つぎに Ctrl Shift P を押してコマンドパレットを開いてください。

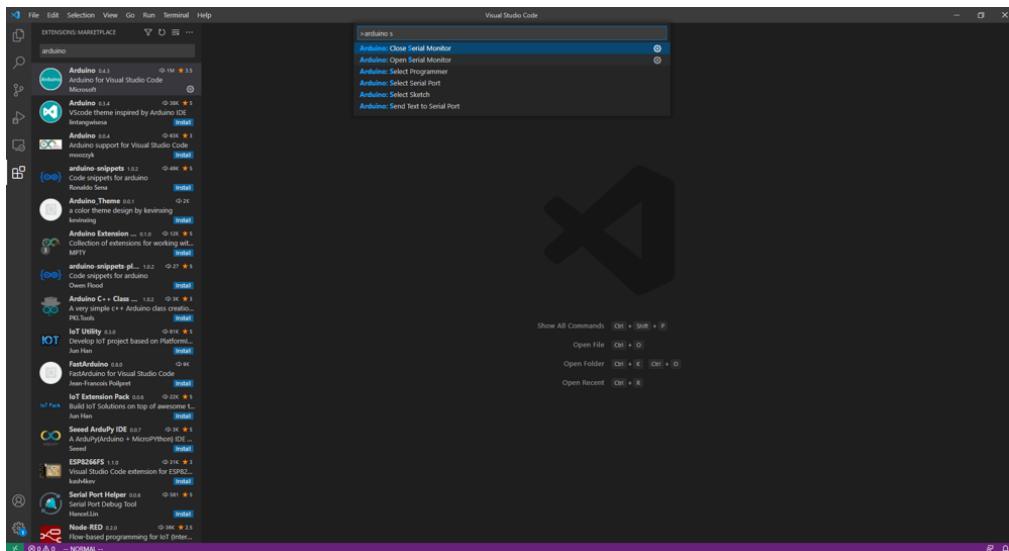


図 6.2 2

arduino serial

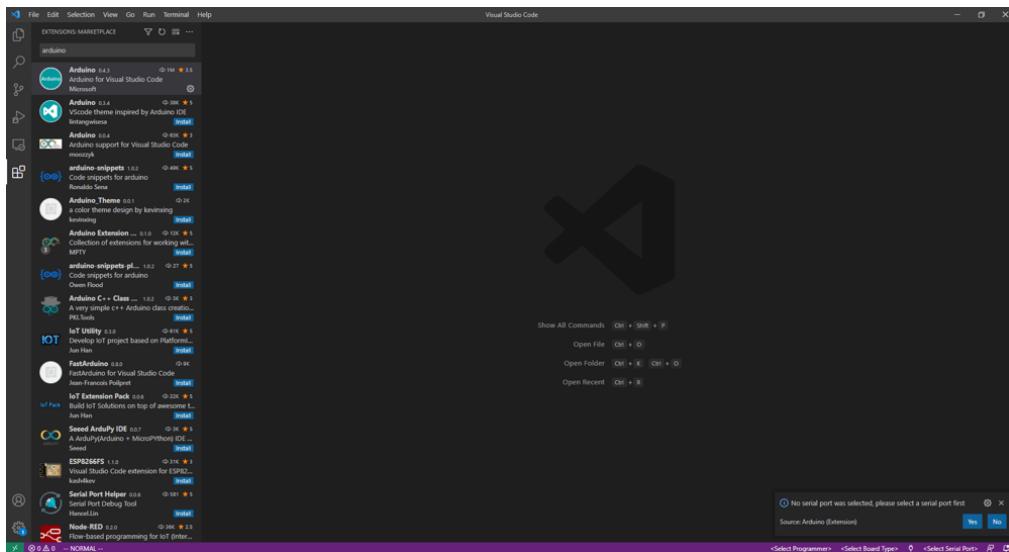


圖 6.3.3

/mnt/c/Users/Document/Arduino

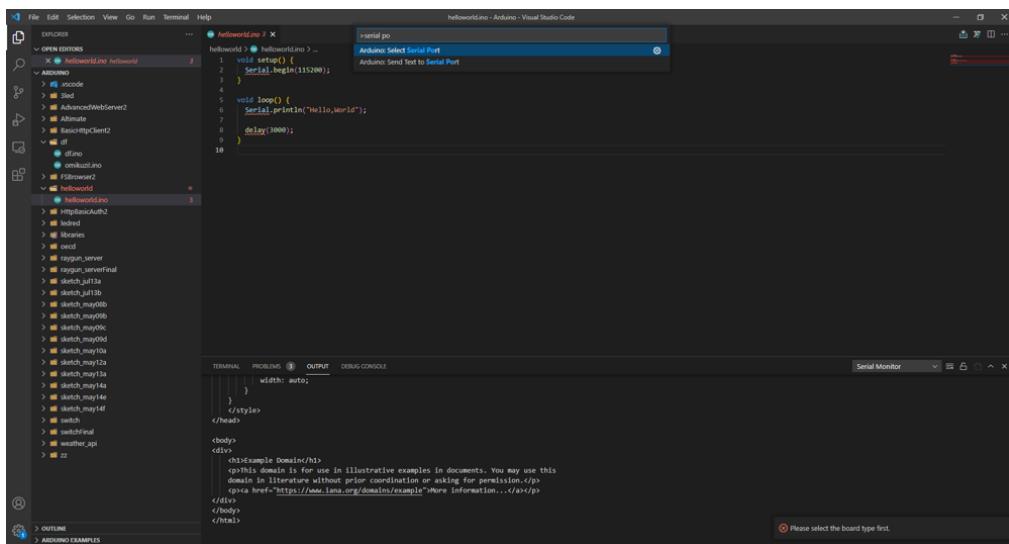


圖 6.4.4

serial port 選択

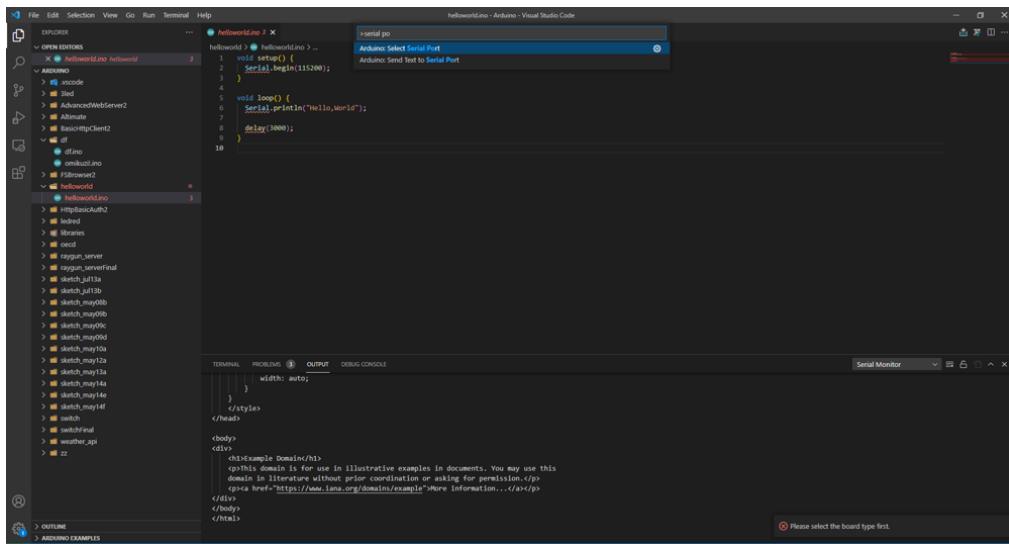


図 6.5 5

ボード選択

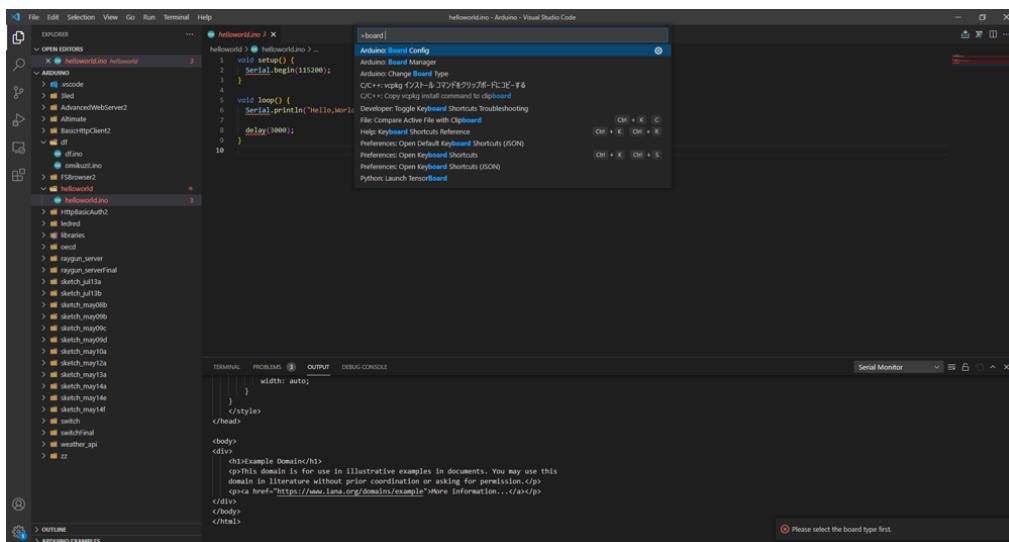


図 6.6 6

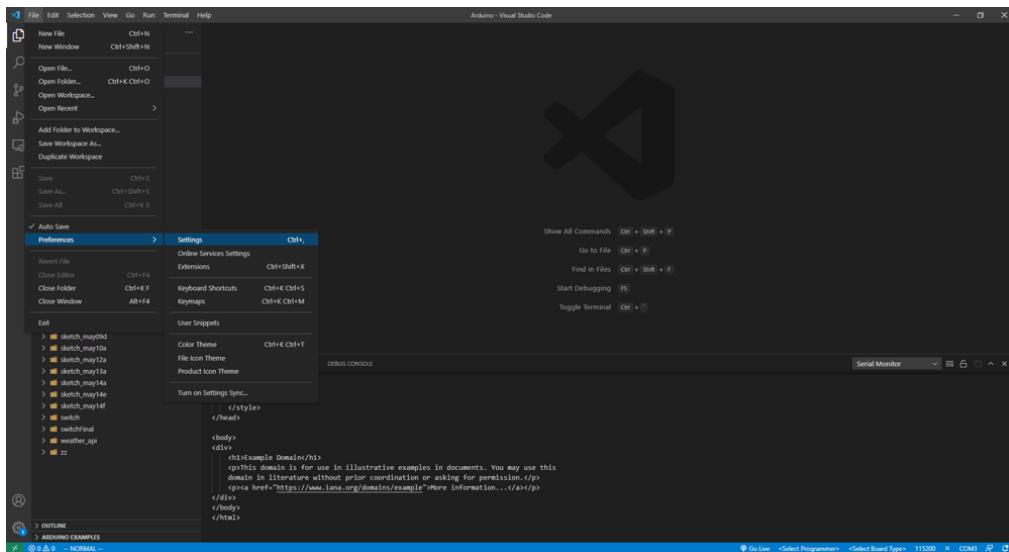


圖 6.7 7

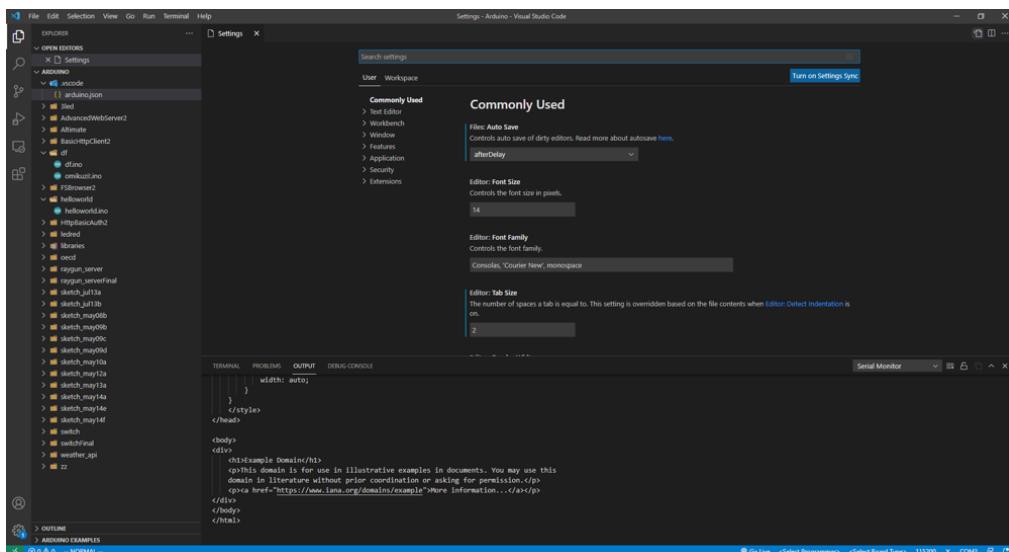


圖 6.8 8

リスト 6.1: json

```
"arduino.additionalUrls": [
    "https://raw.githubusercontent.com/espressif/arduino-esp32/gh-pages/package_esp32_index.json"
],
```

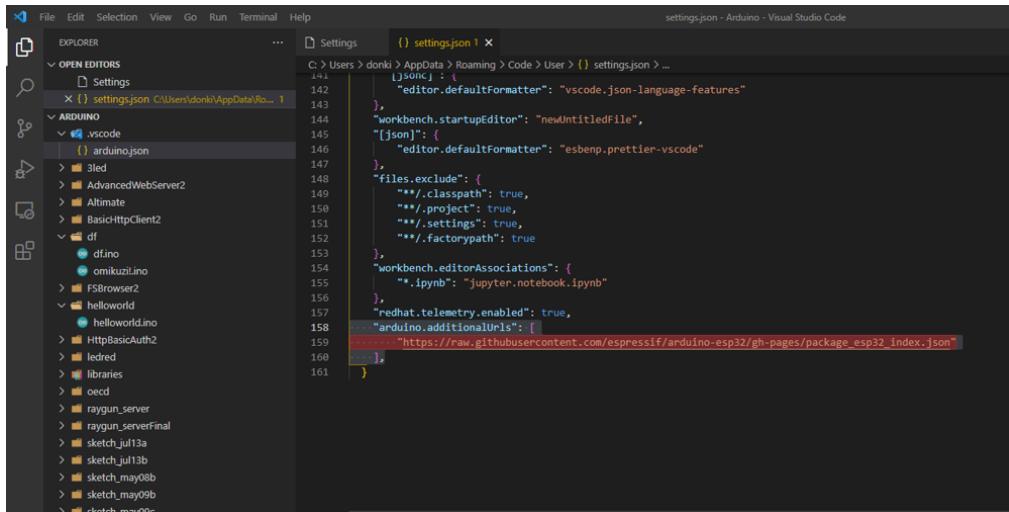


図 6.9 9

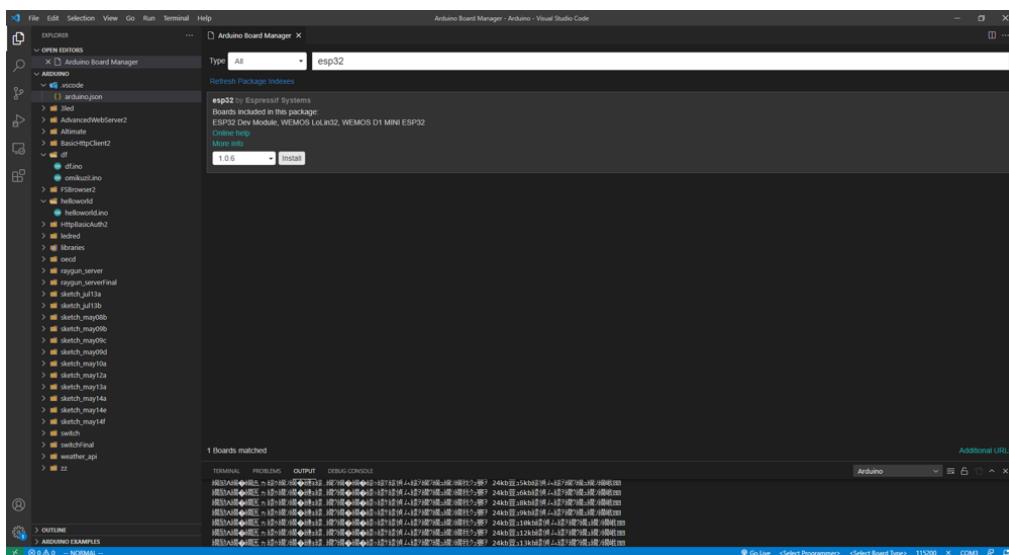


図 6.10 10

arduino bord maneger

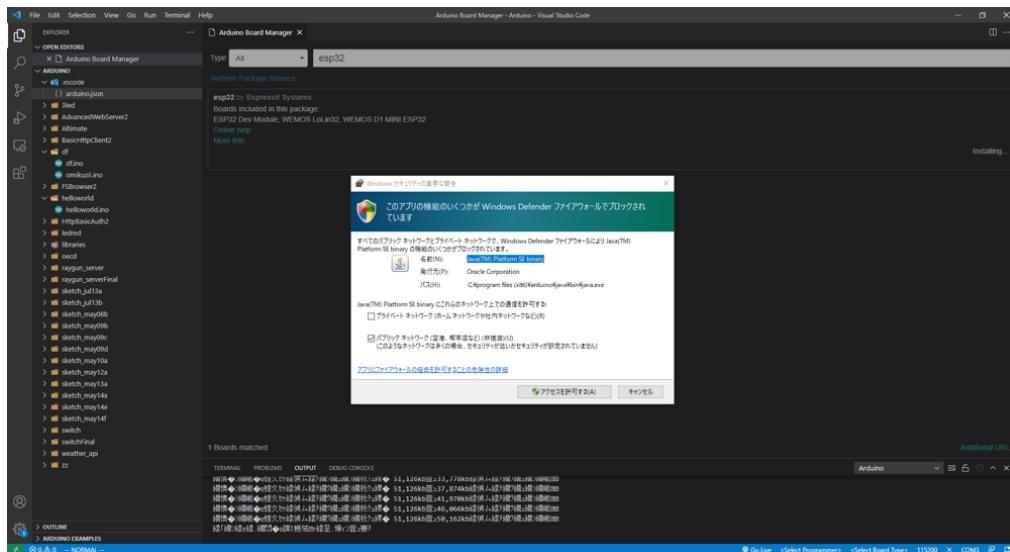


図 6.11 11

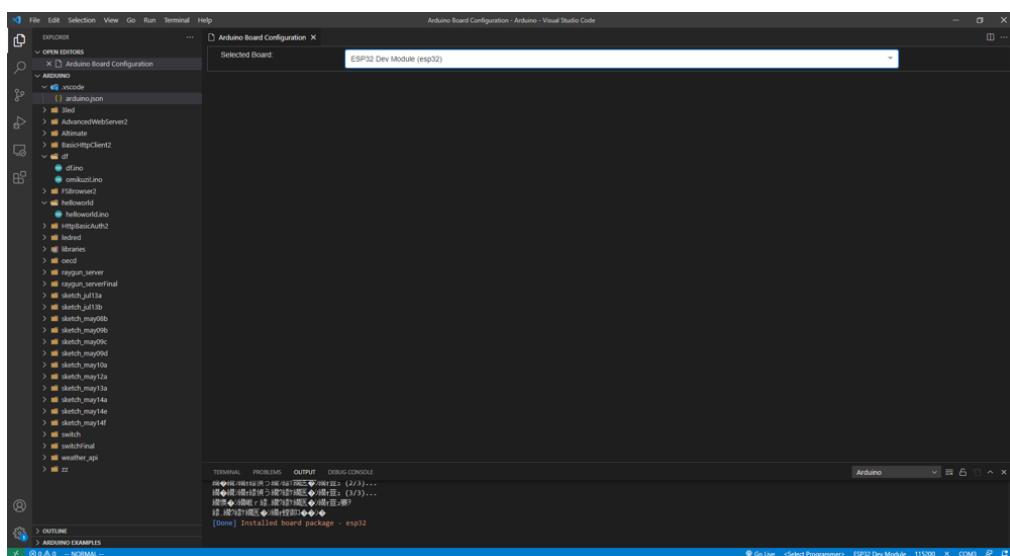


図 6.12 12

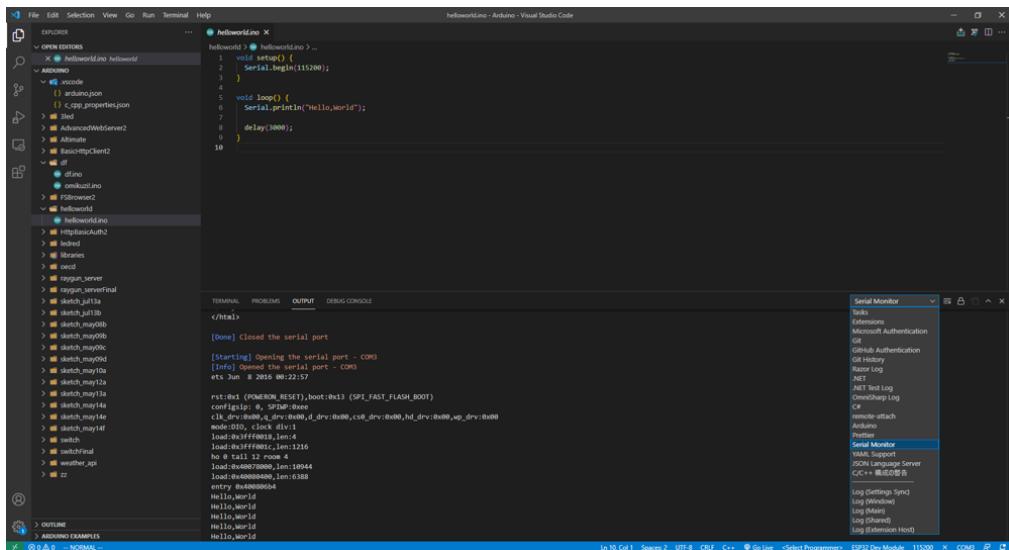


図 6.13 13

Arduino IDE のほうを動かしているとうまくいかない
インクルードパスの設定 `c_cpp_properties.json` `ctrl shift P` `select sketch` でビルド
したいファイルを選択 <https://garretlab.web.fc2.com/arduino/introduction/vscode/>

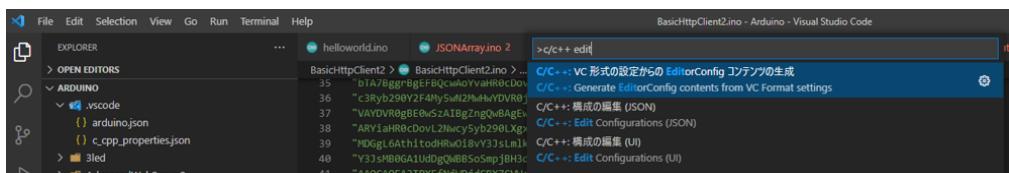


図 6.14 14

付録 A トラブルシューティング

A.1 シリアルモニタで文字化けがする

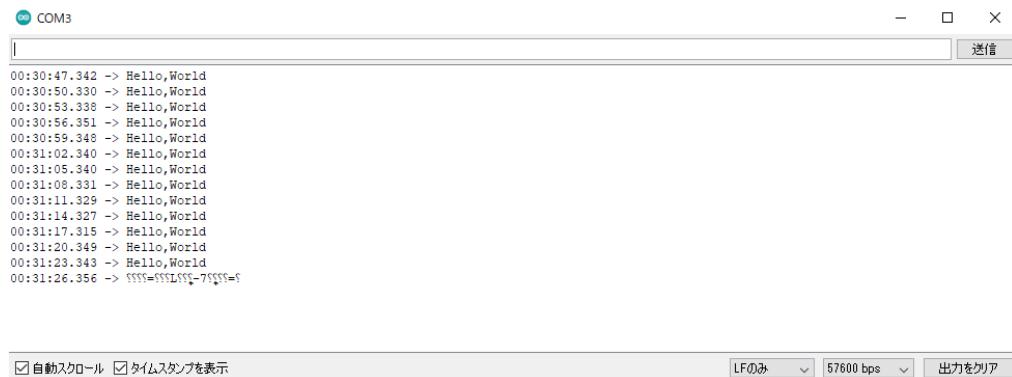


図 A.1.1



図 A.2.2

Upload speed が間違っている可能性がある

A.2 プログラムが書き込めない

シリアルポートが間違っているかもしれない

A.3 プログラムが反映されない



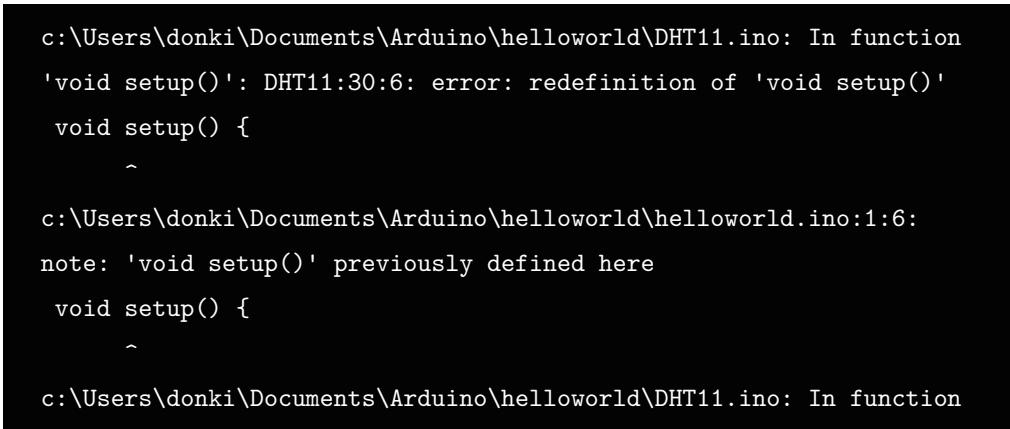
The screenshot shows the Arduino IDE interface. The title bar reads "helloworld | Arduino 1.8.15 (Windows Store 1.8.49.0)". The menu bar includes "ファイル" (File), "編集" (Edit), "スケッチ" (Sketch), "ツール" (Tools), and "ヘルプ" (Help). Below the menu is a toolbar with icons for save, upload, and other functions. The main workspace shows the code for "helloworld":

```
void setup() {  
}  
  
void loop() {  
}
```

図 A.3 3

プログラムの保存を忘れている Ctrl+S で保存してから読み込む

A.4 error: redefinition



The terminal window displays the following error message:

```
c:\Users\donki\Documents\Arduino\helloworld\helloworld.ino: In function  
'void setup()': DHT11:30:6: error: redefinition of 'void setup()'  
void setup() {  
    ^  
  
c:\Users\donki\Documents\Arduino\helloworld\helloworld.ino:1:6:  
note: 'void setup()' previously defined here  
void setup() {  
    ^  
  
c:\Users\donki\Documents\Arduino\helloworld\helloworld.ino: In function
```

```
'void loop()': DHT11:37:6: error: redefinition of 'void loop()'
void loop() {
    ^
c:\Users\donki\Documents\Arduino\helloworld\helloworld.ino:5:6:
note: 'void loop()' previously defined here
void loop() {
    ^
exit status 1
```

- 解決法 Arduino コンパイルエラー (redefinition) 同じフォルダ内に setup() と loop() が重複している際に出るエラー Arduino はコンパイルをファルダ単位で行うため、このようなエラーが出る

A.5 接続ポートに ESP32 が反映されない

デバイスマネージャーに ESP32 の接続ポートが表示されない場合はデバイスドライバをインストールする必要があります。以下のリンクにアクセスしてください。
<https://jp.silabs.com/developers/usb-to-uart-bridge-vcp-drivers>

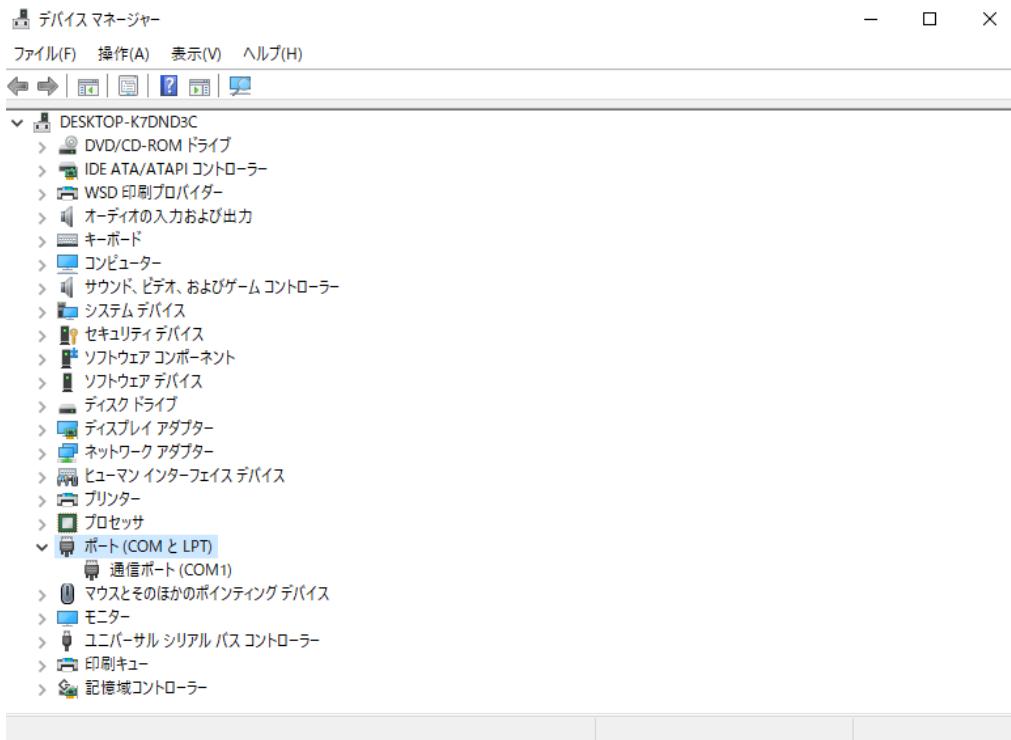


図 A.4.3

VCP ドライバのダウンロードとインストール

Windows、マックintosh、Linux を以下からダウンロードします。

*注：ドライバの Linux 3.x.x および 4.x.x バージョンは、www.kernel.org 内の最新 Linux 3.x.x および 4.x.x ツリー内に格納されています。

レガシ OS ソフトウェアバージョン

ドライバ・パッケージのダウンロード・リンクとサポート情報

ソフトウェア・ダウンロード

[ソフトウェア \(11\)](#)

[ソフトウェア .11](#)

CP210x Universal Windows Driver	v10.1.10
CP210x VCP Mac OSX Driver	v6.0.1
CP210x VCP Windows	v6.7
CP210x Windows Drivers	v6.7.6
CP210x Windows Drivers with Serial Enumerator	v6.7.6

その他 6 個を表示 ソフトウェア

シリアル列挙ドライバ

シリアル列挙ドライバとは、そしてなぜ必要なのか？

図 A.5.3

108 付録 A ツラブルシューティング

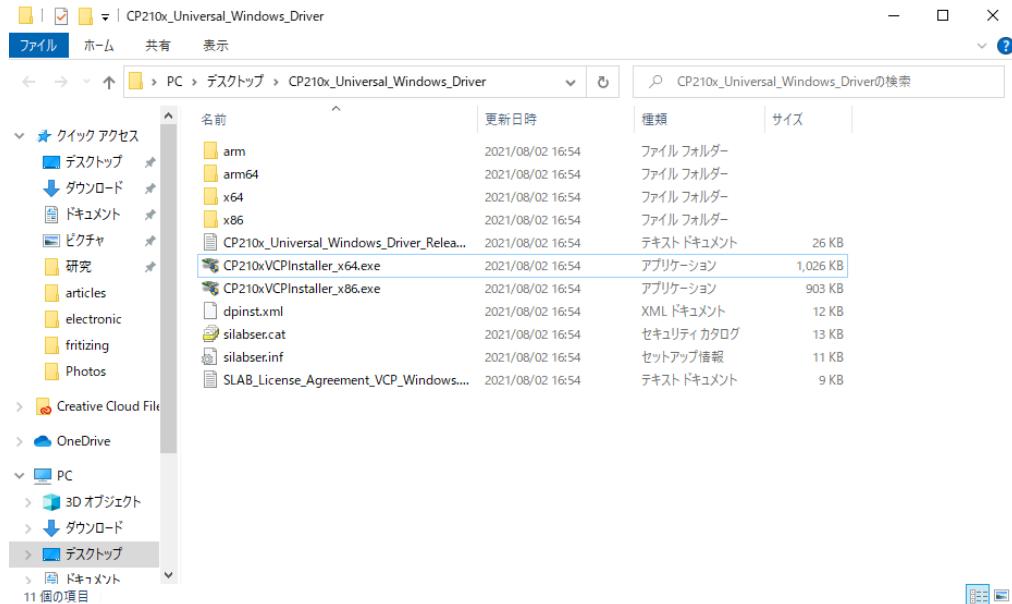


図 A.6.3

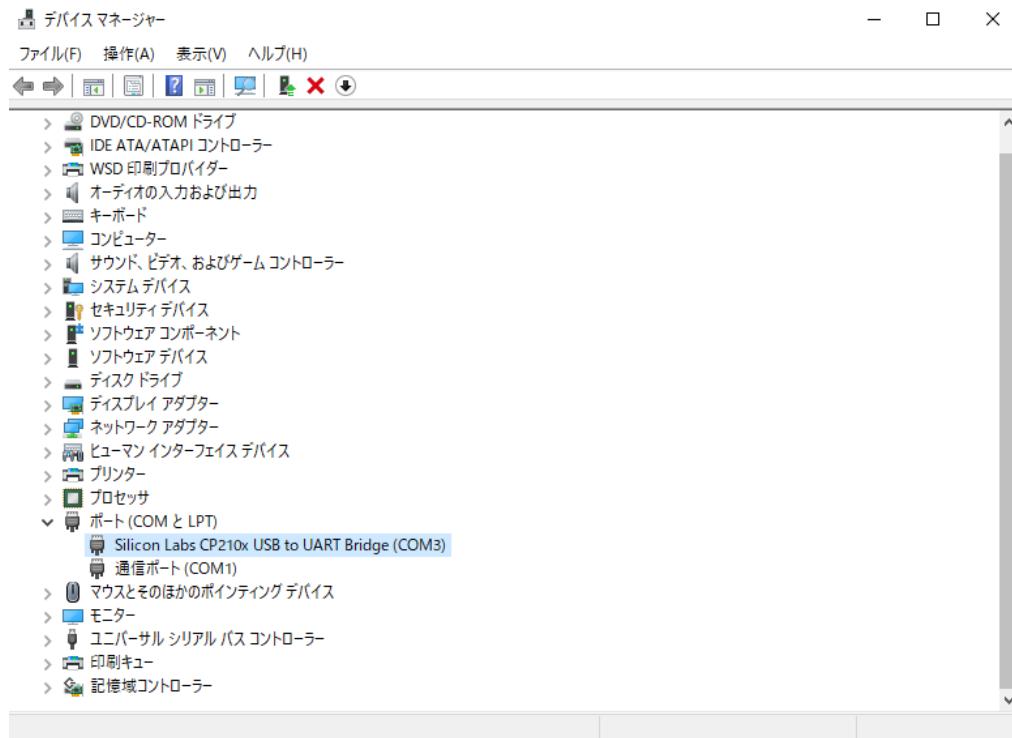


図 A.7.3

A.6 COM ポートがデバイスマネージャーに表示されない

USB ケーブルに問題があるかもデバイスドライバの更新がうまくいっていない

A.7 うまく書き込めない

シリアルモニタについているといけないデバイスドライバを更新する必要がある

A.8 LED の光り方が弱い

抵抗の大きさが違う可能性あり

A.9 回路図どうりなのにつかない

ジャンプワイヤがつかない可能性あり

著者紹介

THEToilet / @THEToilet

あとがきみたいなのにあこがれています。

執筆協力 / @raimu

少し校閲しただけで名前が載りました。

ESP32ではじめる初めてのIoT講座

2021年8月18日 初版第1刷 発行

著者 THEToilet
